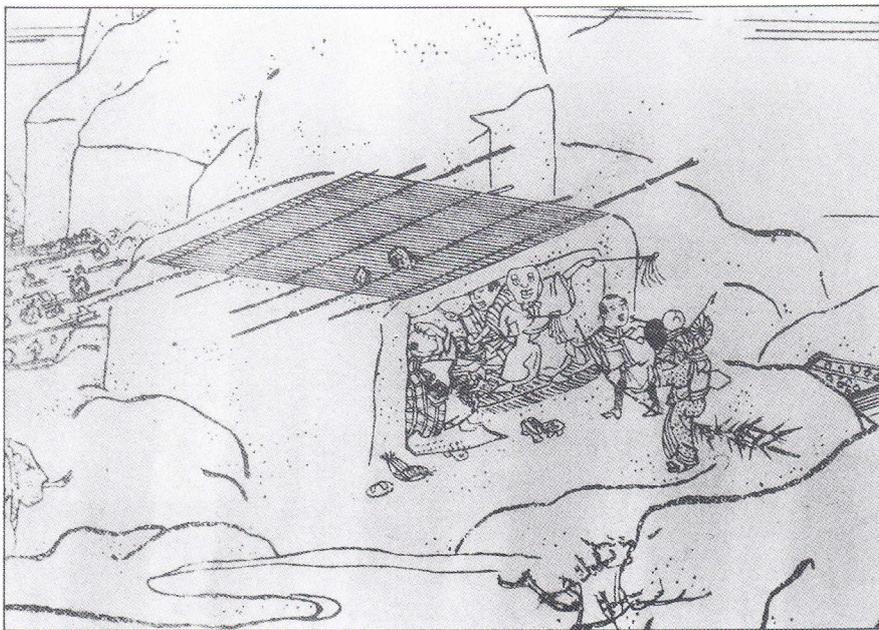


第10章

信仰・儀礼用具



■雪の堂（ホンヤラドウ） 「北越雪譜」より

● 信仰・儀礼用具 ———— 春を待つ心

積雪期の信仰・儀礼用具は、この期間、およそ12月から翌年4月までに行われる年中行事に付随して用いられるものが大半である。もちろん日常の、家の神仏への供え物など、雪中であるためあらかじめ用意しておくものもある。

それぞれの用具類は、項を追って見ることにするが、主要な行事名をここに略記しておくことにする。

12月／コトヨウカ・煤掃き・松迎え・ダイシ講・年取り。
1月／〈大正月〉元旦・仕事始め・釜神さまの年取り・寺方年始・七草・若木迎え。〈小正月〉団子飾り・鳥

追い・モグラモチ追い・ドウラクジン焼き・仏の正月・ハツカ正月。2月／節分・初午・コトヨウカ・十二講。
3月／サンヨ・団子撒き・春彼岸。4月／女の節供・シंगाツヨウカ（月日の異なる所もある）。

次に用具類を性格別に見ると、祭神（仏）の神体（掛図・御札その他）・護符類・供物用具・献花献灯用具・装飾等用具・準備清掃等用具・祭祀用具・予祝演技等用具・縁起物・奉納祈願物・呪術的用具・参拝用具・社交贈答用具などがあるが、年中行事に用いるものは、その行事に合わせて採取・製作するものが少なくない。

〔お供え用〕



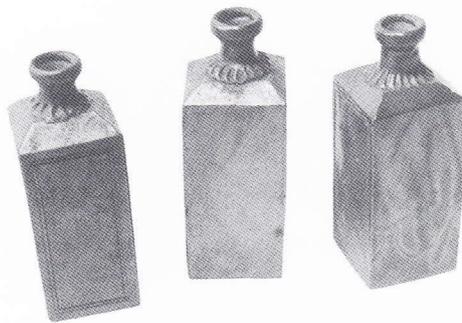
ハナヅト 10-イ-1
高さ78cm 径22cm
藁 供花保存用



オハナ 10-イ-3
高さ60cm(右)
椿・雑木・紙 手作り供花(造花)



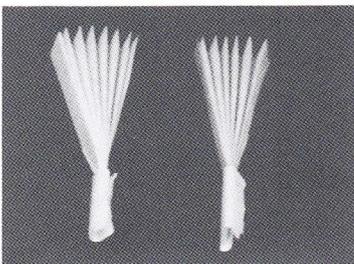
オミキドックリ 10-イ-4
高さ10.8cm
磁器 御神酒供え用



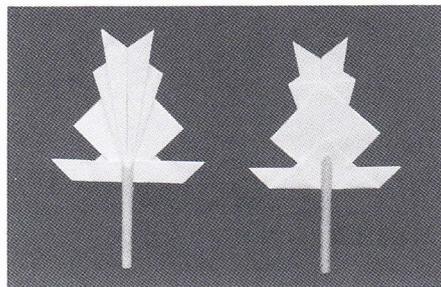
オミキドックリ 10-イ-5
高さ11.6cm
磁器 御神酒供え用



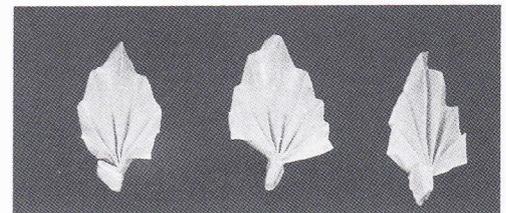
オミキドックリ 10-イ-7
高さ11.2cm
磁器 御神酒供え用



オミキグチ 10-イ-8
高さ14cm
和紙 御神酒供え用
(御神酒徳利の口に挿す)



オミキグチ 10-イ-10
高さ17cm
和紙・葦 御神酒供え用(御神酒徳利の口に挿す)



オミキグチ 10-イ-11
高さ11.2cm
和紙 御神酒供え用(御神酒徳利の口に挿す)

イ 信仰用具

① 神事・仏事等用具

ここに収めたものは、灯明用具・神酒用徳利その他である。正月の神酒に挿すオミキグチは、和紙を折って前頁下段の写真のように作るものが多い。また、椿の葉のついた小枝などを用いることもある。

上段のハナツトは、雪中、供えるべき花が得にくいので、その代用とする椿などの常緑の木をワラツトに入れ、小川に浸して保存するためのものである。オハナは、上記の椿などの小枝に色紙で作った造花を取付けて、寒中仏壇に供えたものである。

〔灯明用〕



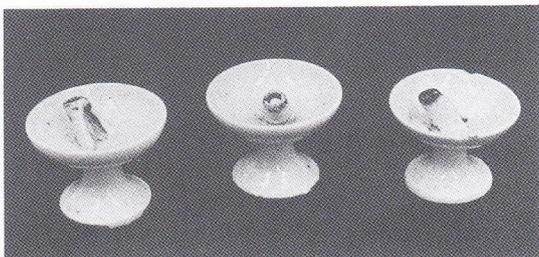
タンコロ 10-イ-20
口径4.9cm 高さ4.7cm
陶器 油火用



ロウソクタテ 10-イ-27
高さ6.9cm
真鍮 ロウソク用



タンコロ 10-イ-25
口径5.9cm 高さ4.9cm
陶器 油火用



タンコロ 10-イ-14
口径5.9cm 高さ5.2cm
磁器 油火用

ダイシコウ

12月23日を大師講^{だいし}といい、小豆粥と大根の焼きなますなどを供え、栗の木などで作った箸と杖を添える。

昔、貧しい老婆の家に、みすばらしい旅の僧が訪れて一夜の宿を乞うた。気の毒に思って泊めたが、進めるべき食物が無い。そこで老婆は、やむを得ず隣の畑から大根を盗み、火で焙^{あぶ}って食膳に供した。僧は喜んだが、老婆は、大根を無断で盗った悔恨と、畑に残る足跡が気になって眠れなかった。しかし翌朝、僧が出立した後、戸を開けて見ると、一面に大雪が積もっていた。大師講の縁起として伝わる「跡かくしの雪」の説話である。

コトヨウカ

12月8日と翌2月8日をコトあるいは、コトヨウカという。また、前者をコトオサメ、後者をコトハジメと呼び分けることもある。この日、小豆粉（小豆あん粉）を入れた団子を作り、これを一升杓に入れてコトの神様に供えた。

コトの神様は、夏場の農家の仕事の神様で、12月のこの日に仕事を終えて山に帰り、2月8日には山から里へ戻るものとされていた。なお、12月8日に山から里へやって来て、2月のその日には山へ帰る正月の神様と途中で出会って問答をする説話が伝えられている。

〔コトヨウカ行事用〕



イッシュウマス 10-イ-30
17.5×17.5cm 高さ8.8cm
杉 団子入れ

〔ダイシコウ行事用〕



ボン 10-イ-31
口径30.8cm 高さ4.7cm
朴 供物をのせる盆



ワン 10-イ-33
口径12cm 高さ7.4cm
木 供物用(小豆粥盛付用)



ハシ 10-イ-35
長さ51.5cm 径1.4cm
栗の若枝 供物用(大師講後はメシバシとして利用)



ハシ 10-イ-37
長さ41.8cm 径1cm
栗の若枝 供物用(大師講後はメシバシとして利用)



ツエ 10-イ-40
長さ56.3cm 径1cm
栗の若枝 供物用

② 大正月・年神迎え用具

正月は、数多い年中行事の中でも最も重要な行事である。それは単に暦が変わって新しい年になるというだけではなく、人々も自然界もすべてのものが新しい生命を得て生まれ変わる時だと人々は考えていたからだ。

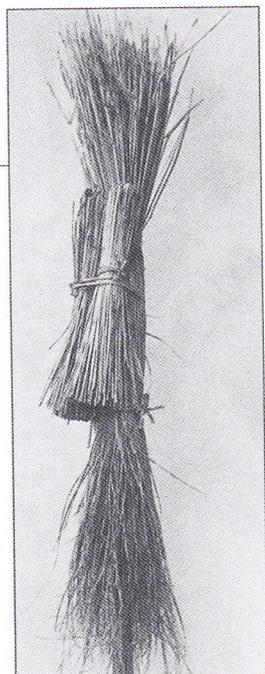
そんな新しい年をもたらししてくれる年神様を迎えるために、人々は、家を少しでもきれいにし、美しく飾り、お供えする御馳走を調べ、自分たちも新しくなれるように身を慎んだ。そのためには、魔物が入り込んでほしくない。正月を迎える用具には、そんな気持ちが伺える。

煤掃きとススオトコ

正月さまを迎える準備として、12月中に煤掃きをする。その日を13日としている所もあるが、この日は「煤逃げ」といって、老人や子供などが近所の家などに行き、お互いに世話し合うので、その都合で日を決めた。

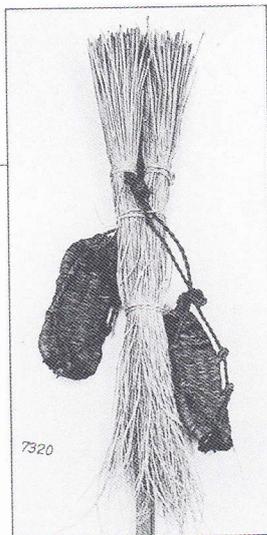
煤掃きには、長い竿に藁をつけた帚を作って使うが、これをススオトコと呼んだ。これは、煤掃きが済むと家の前の雪の上に立て、夕方にはお膳をしつらえ、神酒を供えて労をねぎらう。ススオトコは正月を呼ぶ神であったのだろう。なお、これはそのまま残しておき、小正月15日のサイノカミの火で焼くものとされていた。

〔煤払い用〕



◀煤掃きが済むとこのようにまとめて雪上に立てておく

ススオトコ 10-イ-41
全長230cm
藁・桐 長柄帚



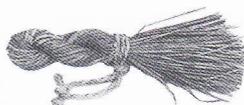
ススオトコ 10-イ-44
全長245cm
藁・竹・草鞋 長柄帚



ススオトコ 10-イ-45
全長252cm
藁・竹 長柄帚



ススオトコ 10-イ-42
全長72cm
藁 火棚用



ススオトコ 10-イ-43
全長30.5cm
藁 神棚用



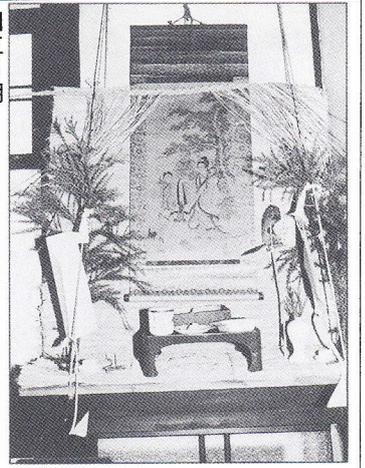
ワラヅト 10-イ-48
全長90cm
藁 神棚塵入れ(大神宮様の煤を入れ鎮守様の脇に納める)

門松と正月棚

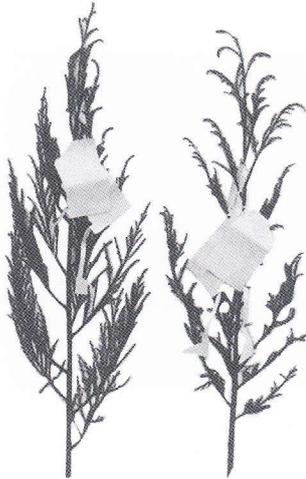
門松は、正月を象徴する飾りであるが、正月の神の依代よりしろでもあったのだろう。山からこれを採ってくることを「松迎え」というが、「正月さま迎え」ともいった。松は、門松だけでなく家の神棚などにも飾るが、早く迎えてきた松は、庭の木や軒端に吊しておき、30日ごろ家に運び入れて注連飾りとともに飾る。当地には松ではなく杉を用いて門飾りにする所があるが、同じ意味のものである。

正月の神としとくじんを迎えて祀る棚も注連飾りと併せて設える。藁で編んだオタナゴモを座敷の壁面などに吊し、板をあてて棚とする。これが正月棚である。古くはこのままであったようだが、後に絵図の掛軸を吊すとが、年徳神と紙に墨書きして飾られるようになった。戦時中に松の採取が禁止され、門松の代用の印刷物が配布されているが、最近では松飾りも多く見られるようになった。

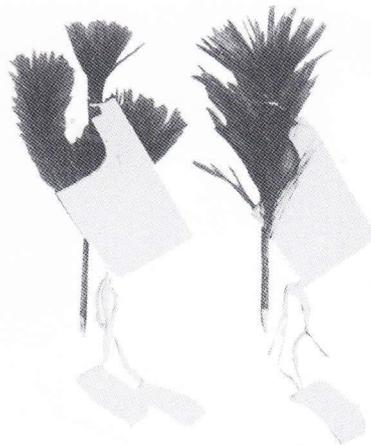
■正月棚



〔門松〕



カドマツ 10-イ-49
長さ111.5cm(1本)
杉・和紙 門松

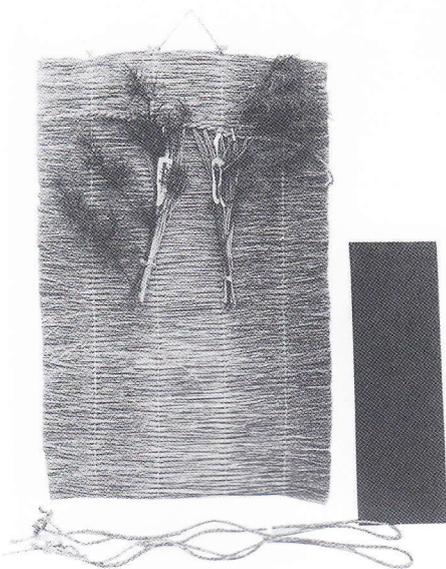


カドマツ 10-イ-50
長さ59.8cm(1本)
赤松・和紙 門松



カドマツフダ 10-イ-51
縦31cm 横9cm
洋紙 門松の代用札

〔年徳神〕



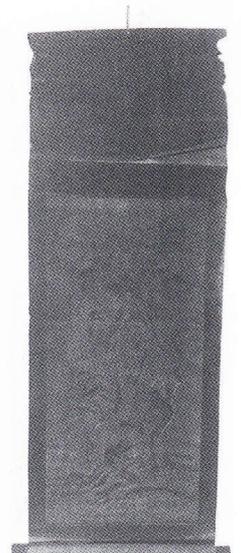
オタナゴモ 10-イ-52
全長125cm 幅30cm
藁 年神迎え用棚



オタナゴモ 10-イ-53
全長120cm 幅48cm
藁 年神迎え用棚



オタナゴモ 10-イ-55
全長120cm 幅86cm
藁 年神迎え用棚



トシトクジン 10-イ-56
全長68cm 幅27.5cm
紙本 掛軸(年神様としてオタナゴモなどに祀る)

注連縄とハッチンチョウ

注連縄は、藁を7・5・3本に分けて出して垂らしながら左縄に^な掛う。注連縄には、普通形の長尺のもの他にワジメ・ゴボウジメ・ホラジメなどの形式があり、正月にはそれぞれ門口・神棚などに飾る。

ハッチンチョウは和紙で作った幣束^{へいそく}の一種で、注連縄に^{かみして}同じように付けるが、本来はこれを豆木に結んで垂らし、松飾りに添えたり神前に供えた。これについて「昔、天竺からシッチンチョウという作物を^{てんじく}食い荒らす大鳥が攻めてきたので、それより大きいハッチンチョウという鳥を作って追い払った」と伝えている。



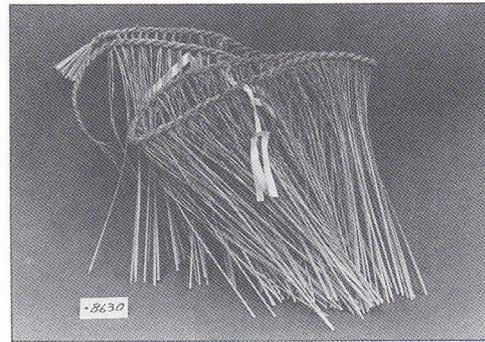
■注連縄に取付けたハッチンチョウ

〔大黒神〕

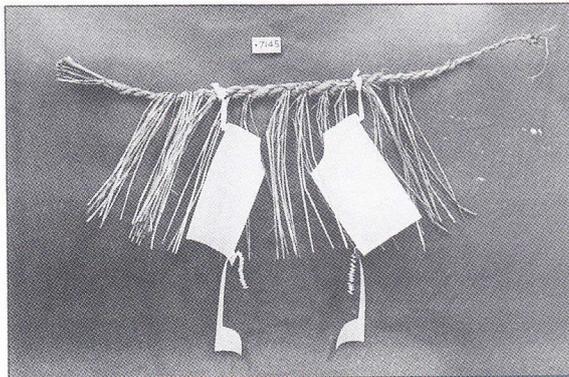


エビスダイコクフダ 10-イ-57
縦24.6cm 横16.6cm
和紙 エビス棚に祀る神札

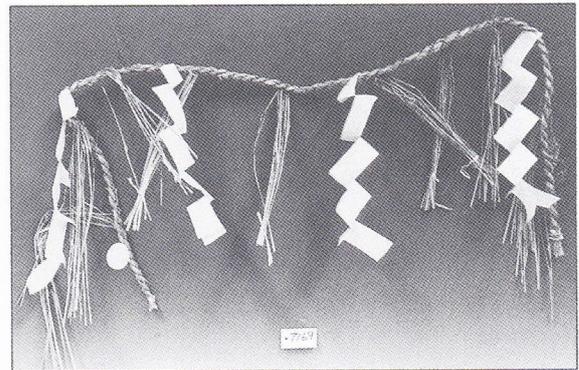
〔注連縄類〕



シメナワ 10-イ-63
全長207cm タレ長さ36cm 縄の太さ0.3~1cm
藁・和紙 門口用



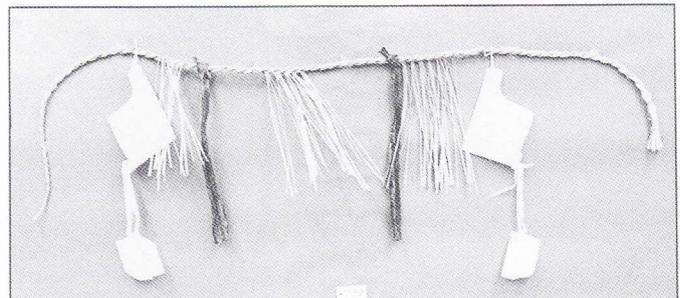
シメナワ 10-イ-74
全長117cm タレ長さ40cm 縄の太さ2.2~3.3cm
藁・和紙 神棚用



シメナワ 10-イ-67
全長170cm タレ長さ31cm 縄の太さ1.1~1.9cm
藁・和紙 門口・神棚用



シメナワ 10-イ-69
全長175cm タレ長さ40cm 縄の太さ0.5~1.6cm
藁・和紙 神棚用

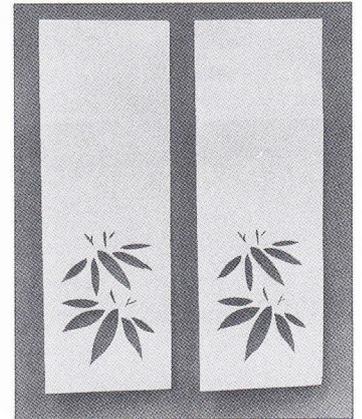


シメナワ 10-イ-70
全長185cm タレ長さ50cm 縄の太さ0.5~1.5cm
藁・和紙・昆布 神棚用

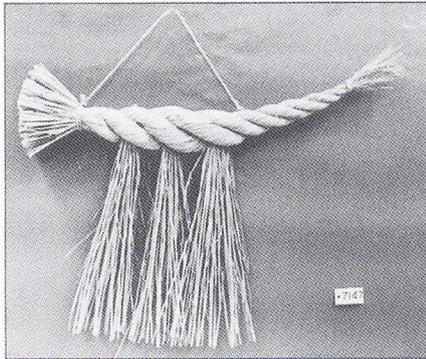
〔お供え用〕



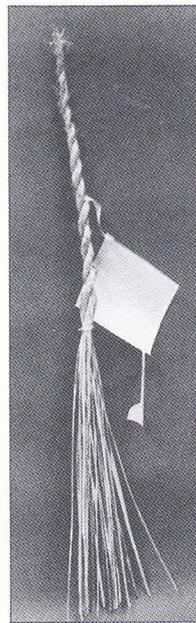
シメナワ 10-イ-75
全長176cm タレ長さ60.5cm 縄の太さ2.7cm
藁 神棚用



カザリガミ 10-イ-89
長さ28.4cm 幅9.7cm
和紙 正月の供え物用敷紙



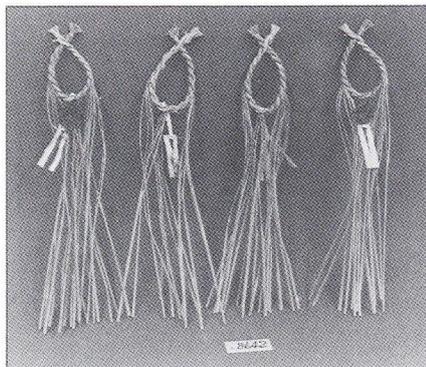
ホラジメ 10-イ-76
全長78cm タレ長さ40cm 縄の太さ4.5cm
藁 大神宮様用



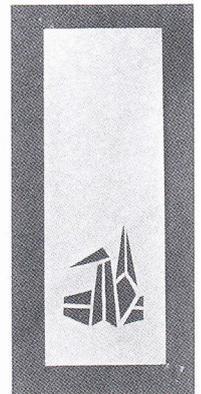
ゴボウジメ 10-イ-78
長さ95cm
藁・和紙 松飾用



カザリガミ 10-イ-90
長さ28cm 幅10cm
和紙 正月の供え物用敷紙



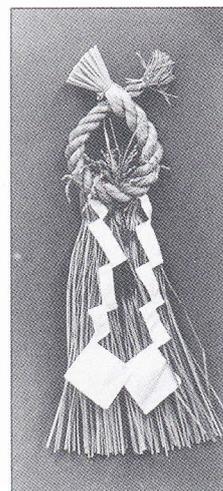
ワジメ 10-イ-83
長さ44cm
藁・和紙 松飾・玄関・各部屋用



カザリガミ 10-イ-91
長さ28cm 幅10cm
和紙 正月の供え物用敷紙



ワジメ 10-イ-80
長さ55cm
藁・和紙 松飾・玄関・各部屋用



ワジメ 10-イ-81
長さ54cm
藁・和紙 松飾・玄関・各部屋用



カザリガミ 10-イ-92
長さ28cm 幅20cm
和紙 正月の供え物用敷紙

釜神さま

正月の3日は「釜神さまの年取り」の日であるが、それについて次のような説話が言い伝えられている。「釜神さまは、貧乏な上に子供が大勢いたので、普通の人と同じ日（12月31日）に年取りができなくて、正月の3日になって、粟飯でやっと年取りができた」という。

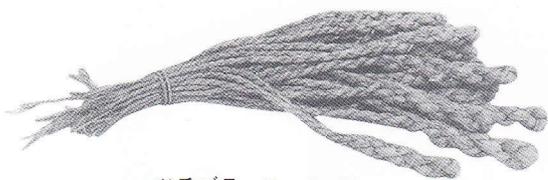
この日、粟のご飯を炊いてムスビを6個（一定ではないが）作り、釜の蓋を裏返してそこに並べ、そのムスビのそれぞれに、細い棒の先を折り曲げたペロと呼ぶものと、折らないもの（これらを「ペロ3本、ボウ3本」と言い習わしている）を突立てて供える。供える場所も一

定ではないが、古くはカマドであった。

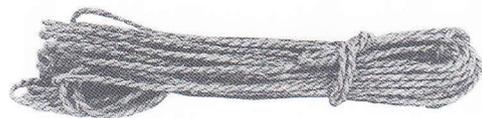
このペロについては、子供が大勢いて親である釜神が食べられないので、これで遊ばせておき、隙を見て食べた、などと説明しているが、この形式からして、ミタマノメシと同じ意味のものであろう。また、このペロと同じ鉤形の小枝などを使った子供の占い遊びがある。

この日に供え物をする釜神には、特に神体と見られるものの無い場合も多いが、小正月に作る木像双体の釜神が周辺の町村にある。そこでは、この木像をこの日の神体としている場合も少なくない。

〔仕事始め用〕



ツチブテ 10-イ-97
全長61cm 径3.1cm(1本)
藁 仕事始め作り物

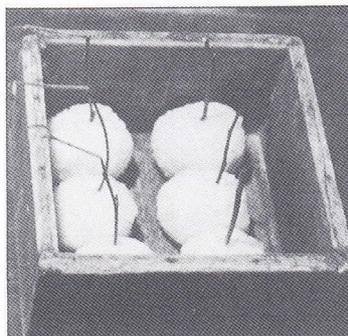


スベナワ 10-イ-98
縄全長4,950cm
藁 仕事始め作り物

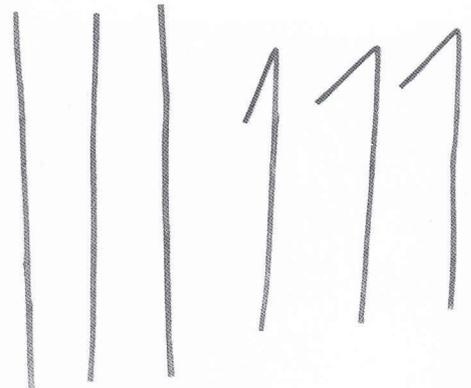
〔釜神様供物用〕



カマブタ 10-イ-102
径37.7cm 高さ11.7cm
ケヤキ 供物台(釜神様に供えるムスビのをせる)



■ムスビにペロとボウを立てたところ



ペロペロ 10-イ-99
ボウ長さ24.7cm(左) ペロ長さ19.1cm(右)
柴 釜神様に供えるムスビに突き挿す

仕事始め

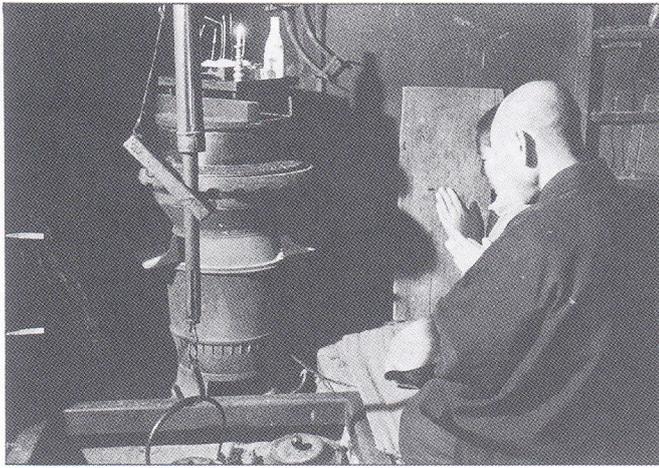
正月2日は、仕事始めの日である。仕事といっても午前中くらいであったが、儀礼的な行事であったから、家族のそれぞれが、必ず手掛けるものとされていた。

まず、男たちが決まっていた仕事は、いわゆる藁仕事である。藁仕事で作る製品は、特に農家を営む上で欠かせない用具類である。この仕事始めで必ずすべきものとされていたのは、「縄緋」と「ツチブテ作り」であった。縄の用途は広くすべての仕事で用いたし、藁細工の基本でもあった。ツチブテは、春耕第一の田掻き作業で、馬に引かせる馬鍬を鞍からとった縄ブテ・竹ブテと呼ぶ

引綱に取付ける補助具である。これは田掻きの途中によく切れるので、大量に必要であった。

女たちは、お針仕事のし始めて、ツッコトをする人もあった。また、かつては重要な現金収入の道であった「縮織り」のための芋績みをこの日にまず始めた。

この日作った藁細工品は、飾り物のようにして恵比須棚に供えた。この日と同じく、小正月14日の夜も夜業をしたが、この時作ったものは団子飾りの枝に吊した。なお、この夜用意した芋は必ず績み上げるものとされ、もし残すと牛の糞になるといった。



■釜神さまの年取り

ゴフについて

ゴフは、護符・御符・御封とも書くように、その内容はさまざまである。しかし、共通しているのは、神仏の加護によって、家や身に降りかかる災難から逃れられるということであり、いわば、お守り札である。最近のもので目立って多くなったのは、交通安全のゴフである。

ゴフには、正月に菩提寺や神社で配るもの、初詣などで受けてくるもの、時には他人が参拜に出掛けた折の土産などがある。頂いたゴフは、門口や神棚などに貼ったり、身につけたりして信仰するが、古くなったものは、サイノカミ焼きの火で焼いた。

〔神仏護符類〕



オフダ 10-イ-104
縦27cm 横9.4cm
和紙 護符



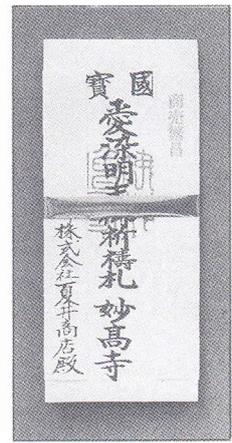
オフダ 10-イ-105
縦27.2cm 横9.4cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-106
縦24.3cm 横6.7cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-107
縦24.3cm 横6.6cm
和紙 護符



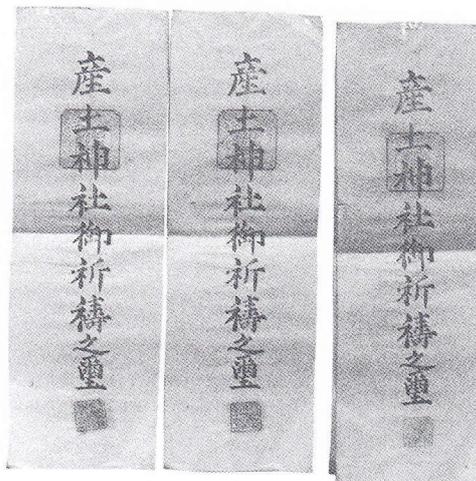
オフダ 10-イ-108
縦21.2cm 横9cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-109
縦33.2cm 横8.5cm
和紙 護符



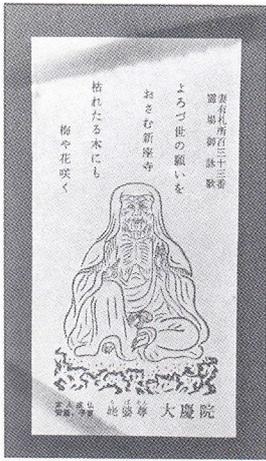
オフダ 10-イ-110
縦33cm 横10.3cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-111
縦39.8cm 横12.9cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-112
縦37cm 横7cm
和紙・その他 護符



オフダ 10-イ-114
縦18.6cm 横9.6cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-117
縦17.7cm 横9.2cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-118
縦21.8cm 横11.8cm
和紙 護符



オフダ 10-イ-120
縦29.2cm 横10cm
和紙 護符

〔商店配り物〕



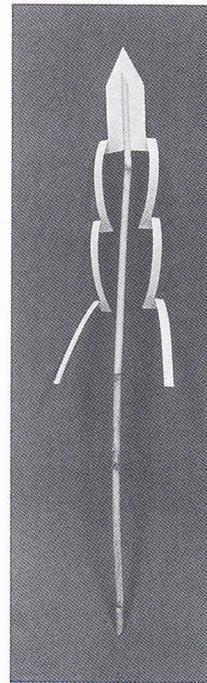
エガミ 10-イ-125
縦35.7cm 横23.7cm
紙 年末・年始に配った
絵入略暦

③ 小正月行事用具

小正月は、百姓の正月ともいわれるように、大正月に比較して、農事に付随する行事が多い。それとともに小正月には農事に関する予祝的なモノツクリや演技なども加わるので、それに用いる用具類は極めて多い。

たとえば、若木迎えを例にとれば、山に入るときの身支度もあり、木を伐る刃物類、さらにそれを持ち帰る運搬具がある。それにも増して大事なものは、山の神への供え物がある。ところが若木迎えに関する行事は、これだけでは終わらない。採ってきた木が次に続く行事に使わ

〔若木迎え行事用〕



ヘイソク 10-イ-126
全高68cm
和紙・葦 若木迎え時に持参する

若木迎え

若木迎えは、正月はじめて山に入り、木を採って来る行事である。この行事には二つの意味があるようだ。一つは、日々の暮らしで常に恩恵を受けている木を山の神にお願いしてはじめて採ることで、もう一つは、これから来る小正月の神の依代よりしろの木を迎えることである。

この日を1月11日とする所が多いが、仕事始めと併せて行う所もあり、採る木もブナを主とする所と団子飾りの木を主とする所があることから、それが察せられる。

いずれの場合も山の神への供え物を持って山に入り拝礼してから採るので、所有者にはこだわらなかった。

れ、それがまた別の用具ともなるのである。

今回の収集資料にかかわる小正月の行事名をあげれば、11日の若木迎えのほか、14日の団子飾り・鳥追い、15日のモグラモチ追い・作占い・魔除け・火祭りなどで、それらの行事に関するものに限られている。それも前記したような事情から、必要なものであっても、この図録の他の項に含まれているものは割愛することにした。

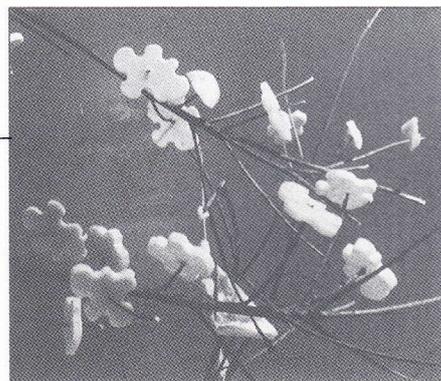
また、たとえば成木責めや道具の年取り・カラス呼わり・仏の正月など、物で示し得ない内容の行事も多かった。

〔団子飾り用〕

団子飾りと成木責め

団子飾りは作飾りともいい、米粉や雑穀粉の団子を、といっても実際は沢山実をつけてほしい作物にかたどったものを作り、木の枝いっぱいにつけて家中に飾る。この木は若木迎えて採ってくるが、ミズキ（団子の木）の他に栗の木やモミジ（花の木）、希に檜の木も使う。

同じく豊かな稔りを予祝する小正月の行事に成木責めがある。15日の朝、柿や栗など成りものの木に向かい、1人が鉈を幹にあてて「成るか成らねか、成らねと成るぞ」と脅す。すると、もう1人が木に代わって「成る成る」と答えて、木に団子のゆで汁をかけてやるのである。



ダンゴノキ 10-イ-129
全高194cm
ミズキ 雑穀・米の粉で作物をかたどったものを挿す

ダンゴノキ 10-イ-130
全高86.5cm
ミズキ 雑穀・米の粉で作物をかたどったものを挿す

ダンゴノキ 10-イ-131
全高193cm
ミズキ 雑穀・米の粉で作物をかたどったものを挿す



■成木責めのようす



■団子飾りとエビス棚

鳥追いとホンヤラドウ

鳥追いは小正月14日の夜に行うが、これは作物を荒らす害鳥をムラから追い払う行事で、ムラの子供の役割だ。子供たちは小正月が近づくと、それぞれに仲間を組んで集まり、ホンヤラドウ（雪ん堂・ホウリンドウ）を作る。当地の一般的な形式は、厚く積んだ雪を縦にコの字型に掘り取って、上に梯子や丸太を渡し、葎や茅藁をかけて屋根とし、前面に筵などを下げて出入口とする。

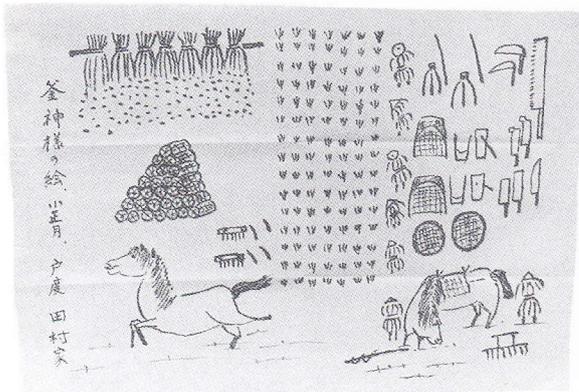
こうしてできた部屋の中央にイロリを作って火を焚き、家から持寄った餅を焼いて食べて遊ぶ。そして、時々外へ出てはムラうちを回って鳥追いをする。拍子木を打ち

鳴らし、鳥追い唄を歌いながら回るのである。

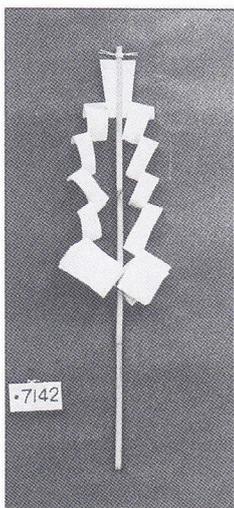
市内赤倉では、この時に雪を高く積んで台を作り、その上に登って鳥追いをした。また、堂の壁面に作ったくぼみに祭神を意味する御幣を立て、右下に示した釜神さまの絵を壁に貼って供え物とした。左下の絵は市内戸渡のもので同じ意味だが、団子飾りの木に吊した。

釜神さまの絵を、正月3日の釜神さまの年取りの時に描いて供えることは他にもあるが、上記の用例はあまり当地でも見られない。また、この図柄は、同じ15日に行う道具の年取りを図化したもののようにも見られる。

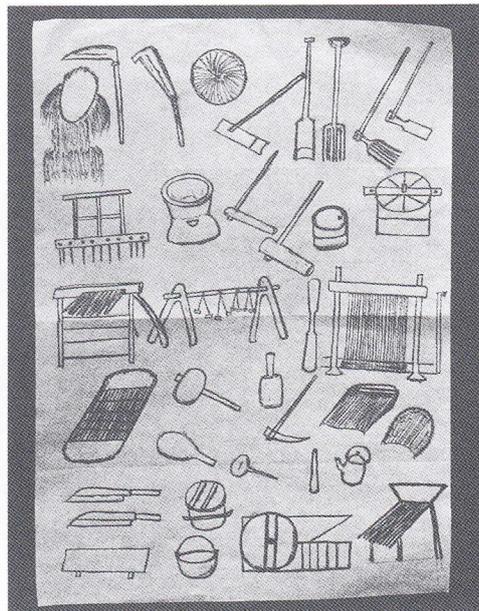
〔鳥追い行事用〕



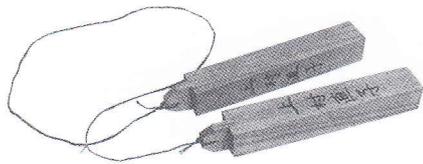
カマガミサマノエ 10-イ-132
縦28.2cm 横40.5cm
和紙 団子飾りを取付けて釜神様に供える



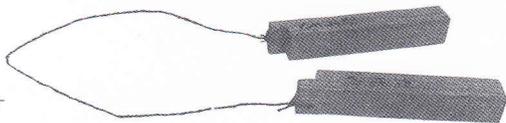
ゴヘイ 10-イ-133
全長52cm
和紙・葎 鳥追い堂の中に立てる



カマガミサマ 10-イ-134
縦39.4cm 横28.2cm
和紙 鳥追い堂の中に供える



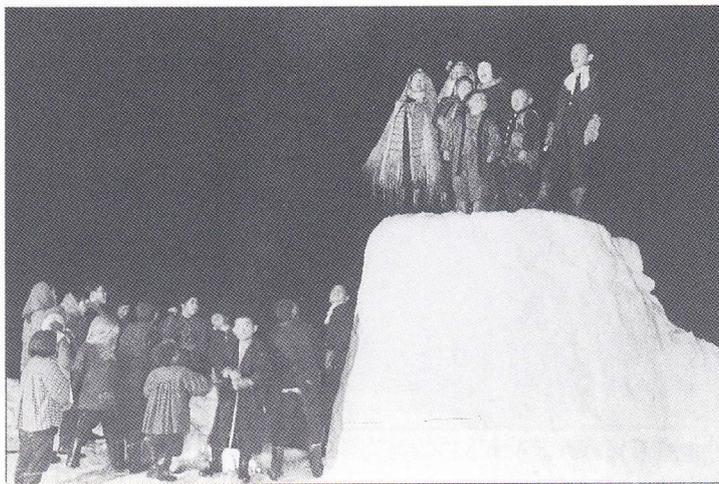
ヒョウシギ 10-イ-135
全長27cm 紐全長106cm 410g
セン 鳥追い唄を歌いながら打ち鳴らす



ヒョウシギ 10-イ-136
全長20cm 紐全長66cm 165g
セン 鳥追い唄を歌いながら打ち鳴らす



■ホンヤラドウ



■トリオイトウ(市内赤倉)

魔除け

正月の御馳走をねらって、山から鬼や魔物がやってくると考えられていたので、人々は魔除けのための呪法を講じた。ヤイカガシは、豆木の二股になった所に焼いたにしん鱧の頭を挟んだもので、戸口ごとに挿す。この時「鱧の頭のヤイカガシ、やれ臭せ、そら臭せ」と唱えた。また、十二月札といって、木札か紙札に「十二月・七五三」などと書いて戸口に貼った。やって来た鬼は、「あつ、まだ十二月だったのか」と言って帰っていくといわれた。右下の藁馬は、馬屋の前に張った注連縄に吊したもので、馬の盗難や脱走を防ぐための呪いであった。

作占い

年頭にあたり、その年の作柄を予知する民俗知識はさまざまあったが、下記の粥占いもその一つである。小正月15日の朝に小豆粥を炊く時、葦を長・中・短と三様に作り、煮る粥の中に入れる。あとでこれを引きあげ、米粒の多く入った品種（長い葦が早生稻、中が中手、短が晩稻）を豊作として判断する。

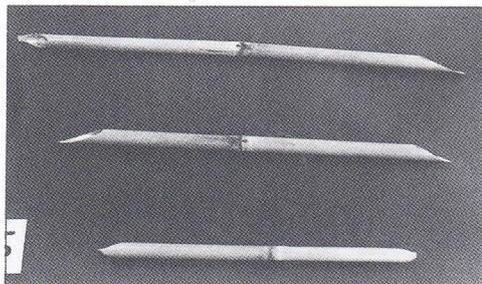
また、節分に撒いた豆12個をイロリに並べて焼き、焼けた色の白・黒加減などにより、作物の生育と深くかわる月ごとの天気を占う。サイノカミの火祭りでも、藁を立てかけた芯木の傾いた方角が豊作になるともいった。

〔モグラモチ追い用〕



ヨコゾチ 10-イ-144
全長27cm 径18.7cm 2,885g
ヤマボウシ 小正月15日の早朝、
縄を付けて家の回りを引いて歩く

〔年占い用〕

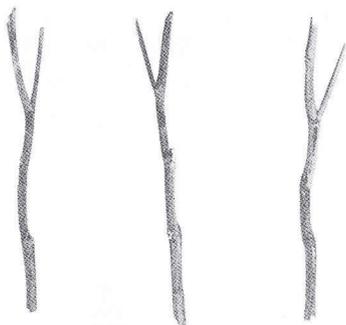


カウラナイ 10-イ-149
全長30.8cm 径1cm(上)
葦 小正月15日に煮る小豆粥に入れ稲作の豊凶を占う

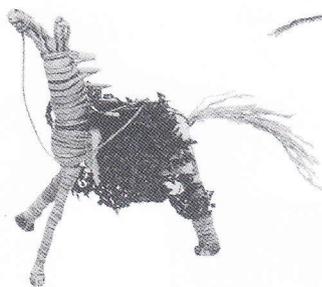


ケエバシ 10-イ-147
全長25.6cm 44g(一対)
粟 小正月15日の朝、小豆粥を食べる時使用
(正月11日の若木迎えの際に材を採取)

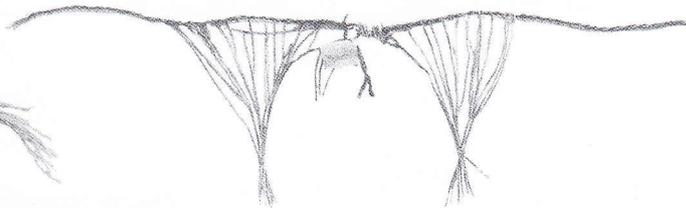
〔魔除け用〕



ヤイカガシ 10-イ-150
長さ21cm
大豆の茎 小正月15日に鱧の頭をはさ
んで戸口に挿す



ワラウマ 10-イ-153
全長23cm 高さ19.5cm
藁 小正月に馬屋の入口の注連縄
に吊す



ワラウマ 10-イ-154
ワラウマ全長26.3cm 高さ15.5cm
藁 小正月に馬屋の入口の注連縄に吊す
(注連縄に吊した状態)

モグラモチ追い

土竜のことを当地方ではモグラモチという。この行事は、いわゆるモグラウチと同じく、夏に畑や畔の地中を荒らして作物に害を及ぼしたり、田の水漏れを起したりする土竜を追い払おうという意味がある。

小正月15日の早朝、子供たちは、藁叩きを使う横槌に縄をつけて、それを引きながら、「モグラモチやどこ行った、槌どんのお通りだ、出たら、かつぶせ」と唱えながら、家のまわりの雪上を回る。鳥追いとと同じく、早く自分の屋敷から追い出すために、他の子供に遅れないよう早く出ることと、大声とを競ったものである。



ドウラクジンと火祭り

ドウラクジンは、十日町地域での一般的な呼び方であるが、これには道楽な神といった意味あいも含んでいるようだ。この他に道楽神・ドウラクジン・サイノカミともいう。路傍には石像が祀られ、さまざまな信仰もあり、庶民的で親近感のある神である。しかし、この神が正月に登場するのは、15日の道楽神焼きが中心である。

まず、正月に飾った注連縄や松飾り、古い神札や縁起物、煤掃きのスオトコなどに藁や杉葉などを加えて、中心に立てた芯木に巻きつけるようにして高く積む。こうしてから火を点じて焼くが、これをドウラクジンの神

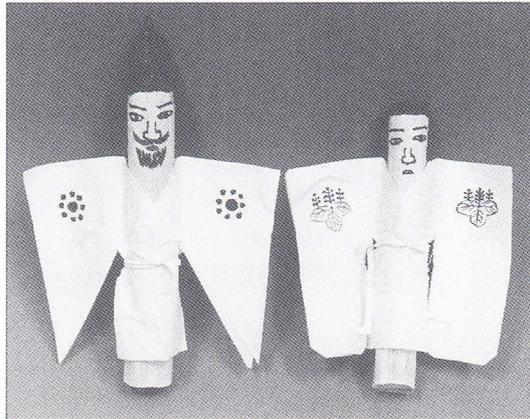
体とみなす。次頁下段の人形は、この芯木の頂上に設えたもので、下体には巨大な藁の男根をつけて神体らしくする。所によっては同様に2体を並べて作り、それぞれジジ・ババなどと呼ぶ。

この火祭りの時、厄年に当る人などは下図のような木像の道楽神を作る。これには、夫婦像をあらゆる双体のものと、単体のものとある。単体の場合、男性像と女性像に分けて、男性は木像を、女性は紙で姉さま人形のようなものを作ったり、あるいはオンピロまたはノンビルといった、オンベすなわち御幣型のものを長い竿に取付

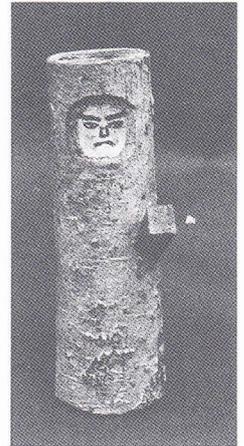
〔火祭り用〕



ドウラクジン 10-イ-155
高さ17.2cm(左) 18cm(右)
杉・桐(台)・和紙 木像(市内江道のもの)



ドウラクジン 10-イ-159
高さ25cm(左) 20.5cm(右)
木・和紙 木像(市内戸波のもの)



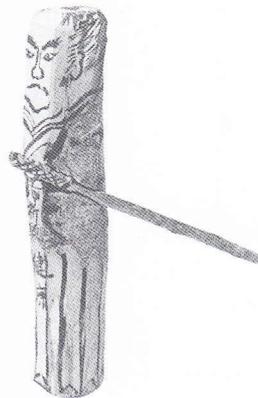
ドウラクジン 10-イ-161
高さ18cm
栗 木像(中魚沼郡中里村のもの)



■厄年の男性が供えたドウラクジン



ドウラクジン 10-イ-156
高さ56.5cm
ミズキ・和紙 木像(市内小貫のもの)



ドウラクジン 10-イ-160
高さ16.5cm
ナラ 木像(中魚沼郡中里村のもの)

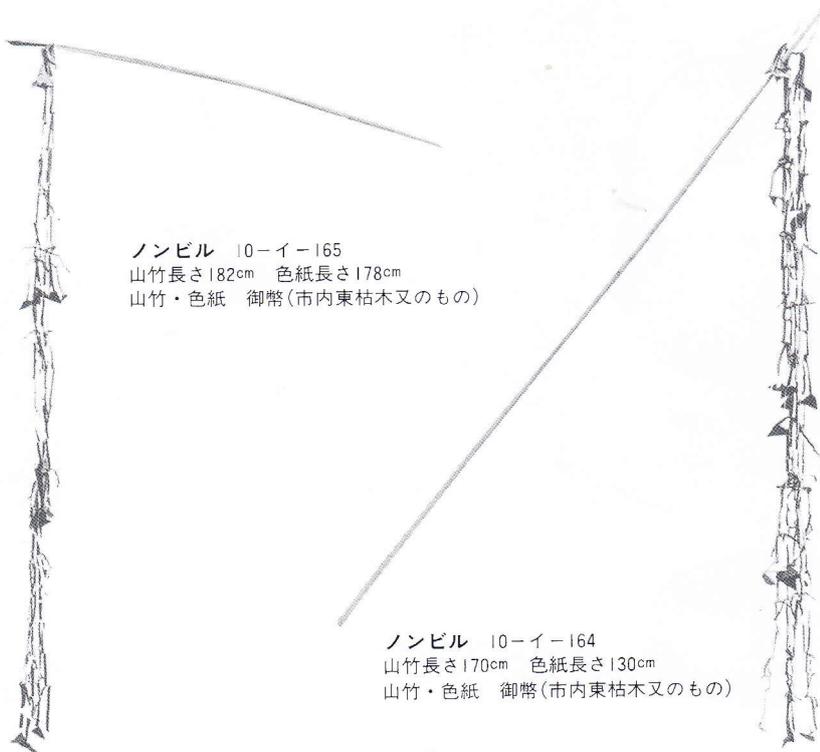


ドウラクジン 10-イ-162
高さ59.8cm
栗 木像(東頸城郡松之山町のもの)

けて作る所もある。

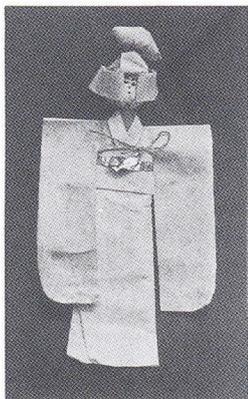
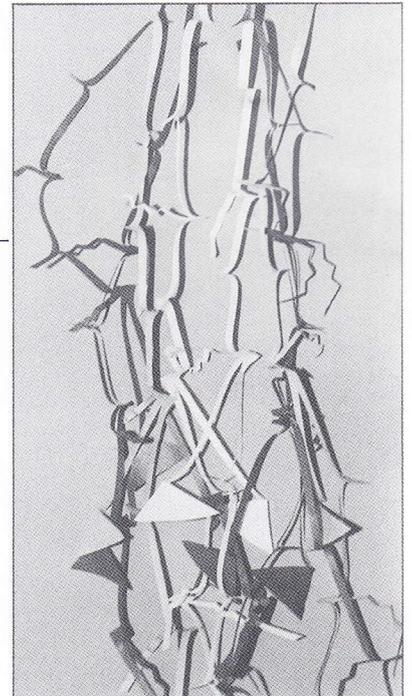
この木像や人形や御幣は、厄年に当る人ごとに作ったもので、これらを火祭りの祭場に持って来て雪上に安置するが、火が燃え盛るころ火中に投じて焼く。つまり、これらは災厄を託して送る形代なのである。

この火が燃える時、子供たちは、「ドウラクジンの^{ほな}馬鹿奴が、イズモザキへよばれていって、後で家を焼かれた^{やっ}焼かれた」などと、はやしたてる。この時の火や灰は厄除けになるとして、病気の箇所^{かたしる}に塗りつけたり、燃え残りを火難除けとして持ち帰ったりした。



ノンビル 10-イ-165
山竹長さ182cm 色紙長さ178cm
山竹・色紙 御幣(市内東枯木又のもの)

ノンビル 10-イ-164
山竹長さ170cm 色紙長さ130cm
山竹・色紙 御幣(市内東枯木又のもの)



アネサ 10-イ-166
全長24.1cm
和紙 アネサ人形型
(中魚沼郡中里村のもの)



ニンギョウ 10-イ-163
全長179cm
藁・和紙・木 藁像(市内新水のもの)



■雪で造ったドウラクジン

④ 節分行事用具

2月3日ごろ、立春の前日が節分である。いよいよ春というわけだが、当地では降雪の盛りで、節分荒れという言葉もあるほどだ。しかし節分は、季節の変わり目として大切な日で、餅を搗いて雑煮を作って祝ったり、大晦日や小正月と同様にヤイカガシを戸口に挿したりした。

この夜、寺方や家々では炒豆を一升枧に入れて豆撒きをするが、この豆を12個イロリで焼いて月ごとの天気を占ったり、豆を搗んで年占いもした。禅寺で「立春大吉」の札を配り、家々で門口に貼るのもこの時である。

〔節分行事用具〕



イッシュウマス 10-イ-167
17.1×17.1cm 高さ8.9cm
松 豆撒き用



イリナベ 10-イ-168
口径39.3cm
鉄 炒り豆用

〔初午行事用具〕

⑤ 初午行事用具

初午は、旧暦の2月の最初の午の日で、この日は稲荷さまの祭日である。この神は、五穀の神・蚕の神・商いの神として信仰されている。

この日は家々で赤飯を炊き、油揚げを作り、ワラザラやサンダワラに入れて供える。また子供たちは、和紙に神号を墨書した奉納幡を作ってお参りに行き、これを雪に突立てて供えた。また、初午の日が早くやってくる年は、火早い（火災が多い）という俗信がある。

2月8日もコトヨウカで、12月と同じ供え物をする。

〔十二講行事用具〕



イナリサマノハタ 10-イ-170
棒全長116cm 和紙75×14cm
和紙・木・藁縄 奉納幡



ワラザラ 10-イ-172
口径18.3cm 高さ7.7cm
藁 供物用



サンダワラ 10-イ-175
径26.5cm 厚さ4cm
藁 供物用



サンダワラ 10-イ-176
径27.5cm 厚さ3.7cm
藁 供物用



ハタ 10-イ-178
全長66.3cm 和紙42×10cm
杉・葦・和紙 奉納幡

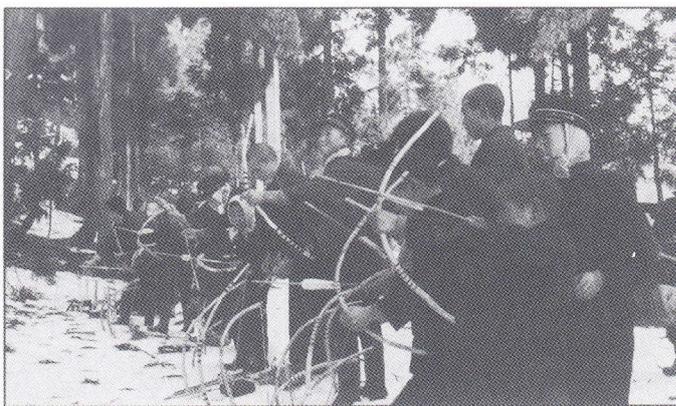


ユミヤ 10-イ-179
弓全長78cm 155g(左) 80cm 129g(右)
矢全長22.6~32.2cm
杉・麻紐・葦・和紙 祭礼用弓矢

◎ 十二講行事用具

旧暦2月12日は十二講じゅうにこうとって、山の神の祭りである。この日の早朝、水に浸した米でスリモチを作り、ワラツトに入れて山の神に供える。またこの日、右のように杉の枝や山竹などで弓を作り、葦で矢を作って奉納し、集まった人たちは唱えごとを言いながら矢を射る。

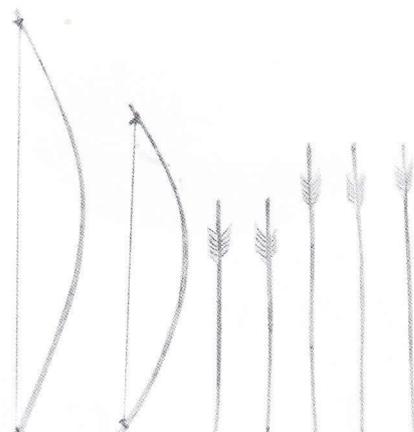
射る方角は山や天に向かってであるが、的まとを作ってそれに射る所もある。この行事には子供たちも参加し、奉納幡まつりぼたを作って立てたりもするが、行事にかかわる一切のことは男性に限られている。



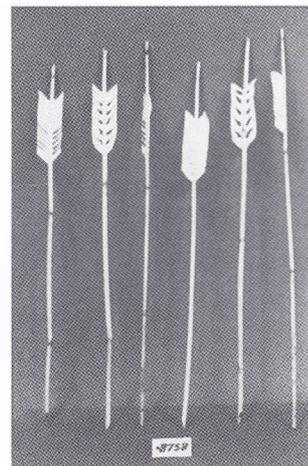
■ 矢を射るようす



ユミ 10-イ-185
全長53.3cm 55g(左) 55.7cm 53g(右)
杉・苧麻 祭礼用弓



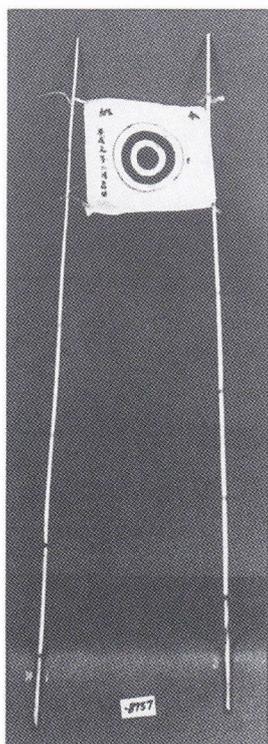
ユミヤ 10-イ-181
弓全長92.5cm 68g(左) 72cm 67g(右)
矢全長51.2~65cm 4~7g
杉・麻縄・葦・和紙 祭礼用弓矢



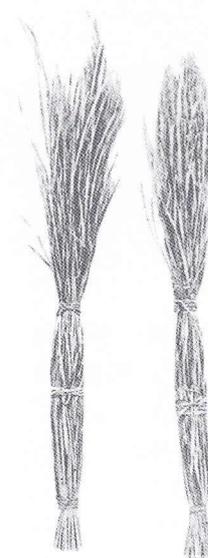
ヤ 10-イ-187
全長65.5~74.2cm 7~10g
葦・和紙 祭礼用矢



ユミ 10-イ-186
全長70.3cm 107g(左)
全長69cm 94g(右)
杉・苧麻 祭礼用弓



マト 10-イ-189
全高159.5cm 的28×30.4cm
竹・和紙 祭礼用弓矢で射る的

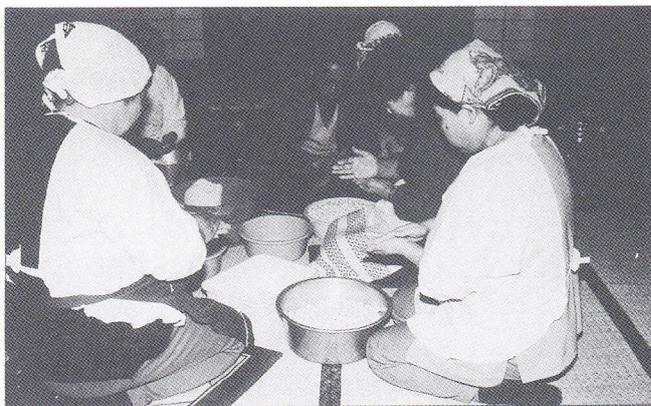


ワラツト 10-イ-191
全長84cm(左) 81cm(右)
藁 供物用(中にスリモチを入れ
的の両側に立てて供える)

⑦ 涅槃行事用具

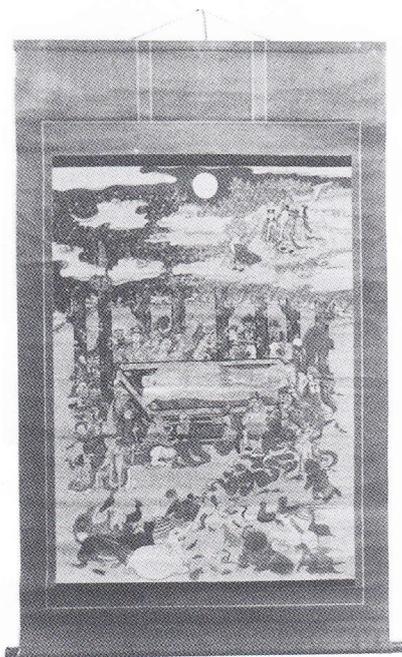
旧暦2月15日は、釈尊しやくそんの亡くなった日で、ニンガツジユウゴンチねはんといって寺参りをする。寺方では涅槃図の掛軸を掛けて涅槃会を行い、お供えした団子を参拝者たちに撒き与える。寺院の無いムラ方でもお堂に集まって百万遍の数珠を回したりして念仏し、持寄った米を粉にして捏ね鉢で捏ねて団子を作り、同じように撒く。

子供たちは、団子拾いが楽しみで大勢集まってくる。拾った団子は、夏にマムシ除けになるなどといって小袋に入れ、山行きの時などお守りとして携帯した。



■ 団子撒きの団子を丸めるようす

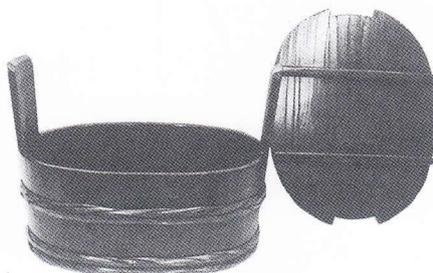
〔涅槃行事用具〕



ネハNZ 10-イ-192
全長151.5cm 幅92.5cm
紙 釈迦涅槃図の掛軸



コネバチ 10-イ-193
口径61cm 5,155g
松 団子作り用



テオケ 10-イ-196
口径52.4cm 4,320g
杉 団子撒き用



ダンゴブクロ 10-イ-197
長さ5.3cm 幅4.3cm 5g(1個)
絹・木綿 団子入り袋

〔天神講行事用具〕



テンジンサマ 10-イ-198
全長72cm 幅23.2cm
紙 天神講用掛軸

⑧ 天神講行事用具

天神講は、勉強の神さまといわれる天神さますがわらみちさね(菅原道真)を祀る子供たち主体の行事で、年に1度ムラの学童たちみんなが集まって行なった。

天神さまの命日は2月25日であり、本来はこの日が、他の月でも25日を縁日として選ぶらしいが、実際には学校やその他の事情で適宜に日を決めて行なった。この行事は、神信心といいながらも、子供たちにとっては公認された楽しみながの日で、彼らにすれば大人たちの講や流しことと同様であった。むしろそれらの時期に合せて、秋深

くなってからする所が多かった。

天神講が近づくと年長の子供たちが寄合って、日取はどうする、御馳走は何がいい、宿はどこの家を貸してもらおうなど、あれこれと段取を相談し、楽しい遊び番組も計画する。前日ごろ各人が料理材料を家から持寄って準備する。こうして、すべて自分たちの手で組立てた天神講だから楽しさは格別で、チビっ子も各人にしつらえた膳につく。そこには子供たちの世界があった。

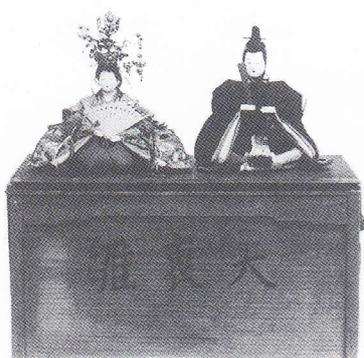
天神講の用具といっても特定のものは画像の掛軸くらいで、器物類は借り物、遊び道具は持寄りであった。

◎ 節供行事用具

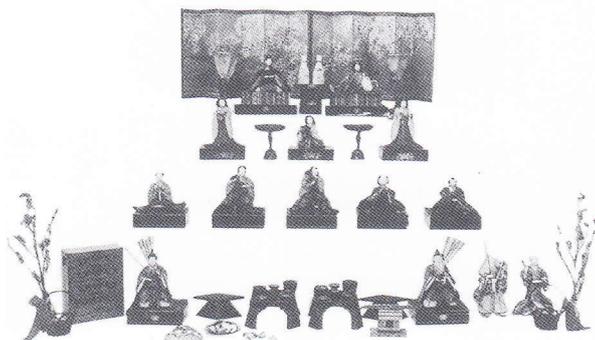
3月3日は桃の節供であるが、当地では1カ月遅れて4月3日に行い、女の節供といった。この節供は雛祭りの日でもあり、最近になって雛飾りをする家も多くなったが、少し前までは地域全体から見れば一般的なことではなかった。

こうした行事の普及は、織物産地として京・大阪や江戸との交流が多かった問屋筋などに始まったものらしく、市街地にしても、一斉にというものではなかった。一式の人形を揃えるにしても、内裏雛・三人官女・五人ばやしと

〔節供行事用具〕



ダイリビナ 10-イ-200
人形高さ25cm(左) 22.3cm(右)
内裏雛



ヒナドウグ 10-イ-201
人形高さ8.7~16.3cm
飾り道具一式

⑩ サンヨ行事用具

サンヨは、3月3日の夜の毘沙門天(多聞天)の祭りに行われる裸押合いの俗称である。

この夜、集まった参拝者に向かって縁起物の景品が撒かれる。これが撒与だが、この時、若者たちは禪ぜん1本の姿で参加し、「サンヨ、サンヨ」の掛声かこゑで揉もみ合いながら景品を奪い合うので、この名が付いた。

さまざまな景品の中で、最高の縁起物とされるのが福俵ふくだわらであり、押合いはこれに集中する。以前は聖衆院が祭場であったが、現在は時宗寺院の来迎寺で行なっている。

いったように順次に求めたのが実情であった。

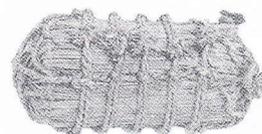
この近郷には以前、この日に紙人形を作って飾り、後にそれを川に流すという流し雛と見られる習俗があったというから、昔は紙や土の人形も飾ったのだと思う。また近年まで、人形見にんぎょうみといって、この日、子供たちが他家を訪れ、飾った人形を見て歩く風習もあった。

また、花見や山遊びを子供たちや女衆がしたのも、この女の節供の日であった。古くはこの節供には餅を搗いて、これを黄な粉餅にして食べたり、嫁たちは菱餅に切つて、それを手土産に里帰りをしたものであった。

〔サンヨ行事用具〕



タワラ 10-イ-202
全長27.8cm 径8.8cm 302g
藁 撒き与えた景品の福俵



タワラ 10-イ-203
全長23.5cm 径9.6cm 295g
藁 撒き与えた景品の福俵



オフダ 10-イ-207
縦24.4cm 横6.1cm
和紙 祈禱札



オフダ 10-イ-209
縦28.5cm 横8.7cm
和紙 護摩札



オフダ 10-イ-211
縦30.1cm 横7cm
杉・和紙 祈禱札



■サンヨのようす

⑪ 彼岸行事用具

春の彼岸は、春分の日を中心に一週間続く。平年であれば、この時期はまだ深い雪に覆われているので、家ごとの墓の所在もわからない。そこで、各家では雪原となった墓地に雪で墓を作り、そこにお参りする。

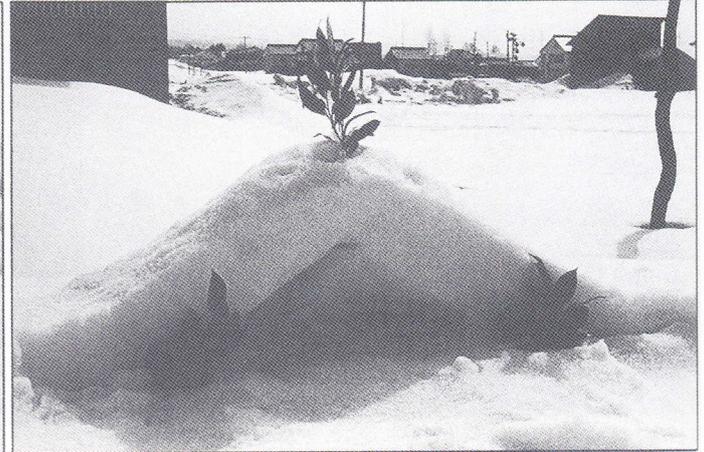
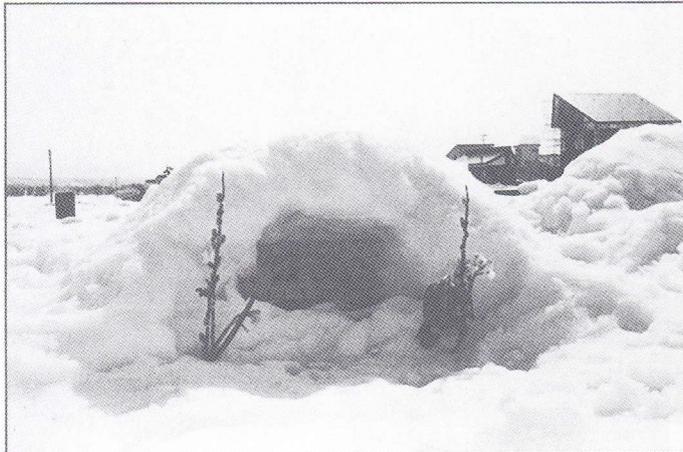
雪墓の作り方は一定ではないが、土饅頭どまんじゅうのようにした堂型、雪を横長に積んだ台型、石碑に似せた角型に大別できる。しかし、いずれの場合も椿や杉など常緑の小枝を立てる。これは彼岸に里帰りする祖霊よりしろの依代である。

この雪墓は、雪国らしい景観をあらわす造形物だが、

雪であるため形を残さない。次頁左下のオハナは、季節的に生花など得にくいいため、紙に花や野菜を描いて小枝などにつけ、雪墓に立ててて献花としたものである。

彼岸には、入り日・中日・送り日のそれぞれに、家の門先で藁を焚いて、迎え火・送り火とするが、次頁写真のように2個並べた藁の場合は、これをジジ・ババと呼び、人形に見立てる。この行事をホツケ(=仏)タチといい、入り日の迎え火をキナレ、中日のをナカンダチ、送り火をイキナレと呼び分けたりするが、これは、この時に仏さまに呼びかける唱えごとの言葉から来ている。

雪墓のいろいろ



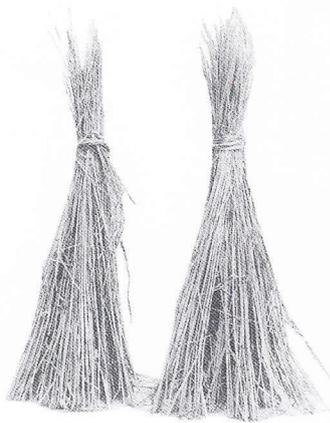


■ホツケタチのようす

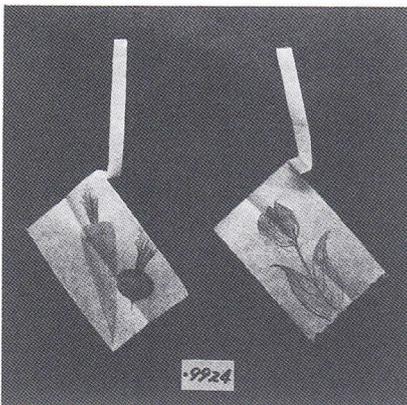
〔彼岸行事用具〕



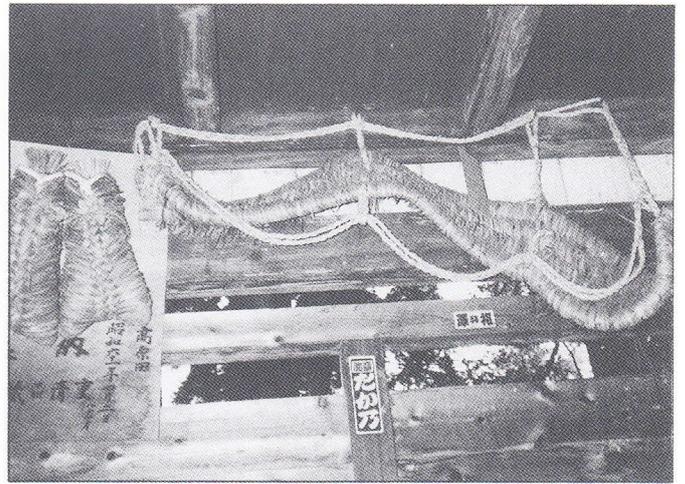
コシキ 10-イ-213
全長103.7cm 刃先幅26cm 940g
ブナ 雪墓作り用木鋤



ワラ 10-イ-215
高さ90cm
藁 迎え火・送り火用



オハナ 10-イ-216
18.1×13.6cm(左) 17.7×14.2cm(右)
和紙 雪墓用供物(造花)

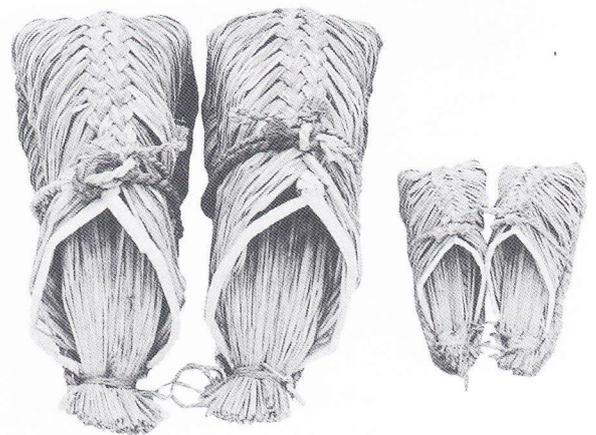


■奉納グツ(左)と奉納ワラジ(右)

〔その他用(奉納グツ)〕



クツ 10-イ-219
長さ64cm 高さ31.5cm 5,170g
スゲ(タヌキラン) 大型藁沓
(中魚沼郡川西町友重の千手観音仁王堂の奉納雪沓)



クツ 10-イ-221
長さ49.3cm 幅20.5cm 1,860g(左)
スゲ(タヌキラン) 大型藁沓
(中魚沼郡川西町友重の千手観音仁王堂の奉納雪沓)

口 儀礼用具

① 年取り行事用具

ここに年取り行事用具として掲げたものは、黒漆塗りの膳とそれに使う椀の類だけで、要するに食事用具の一部のみである。実際には幾十倍もの用具が使用されるのだが、専用でないため除外した。

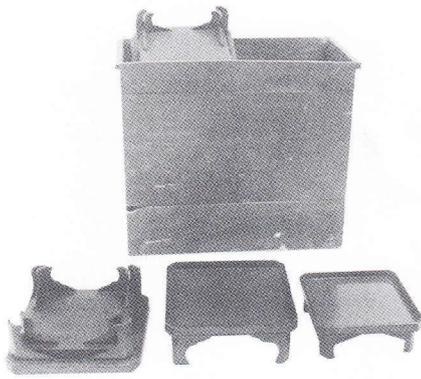
この膳・椀類にしても年取りの専用具とは言えないのだが、これらはその家の貴重な用具であって、たとえば大事な客を迎えるあらたまった席で用いることはあっても、その家の家族たちだけで使うのは年取りの膳だけである。その意味では専用具とも見られる訳であり、家族

だけでこの客膳を用いることそれ自体が、ハレの儀式にふさわしい舞台設定となるのである。

年取りの膳という儀礼の食事の本番は12月31日だが、年が明けて、元日および小正月15日の昼または夜の食事でも、年取りの膳と呼んで同じようにした。年間を通じて、こうして座をあらため、特別な膳部に家族でつくのは、この年取りだけだったのである。

年取りの食事には必ず家族が顔を揃えるものとされ、他人の介入は許さない。そのために玄関の戸には棧さんをおろし、出口は雪ダレで閉じて、そのことを表わした。

〔年取り行事用具〕



ゼン 10-ロー-1
 本膳 31.5×31.5cm 高さ12.5cm
 二の膳 26.5×26.5cm 高さ10.2cm
 木(漆塗り) 年取りの膳用



■イナダキ

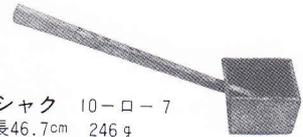


ワン 10-ロー-2
 椀 口径11.6cm 高さ8.1cm
 木(漆塗り) 年取りの膳用

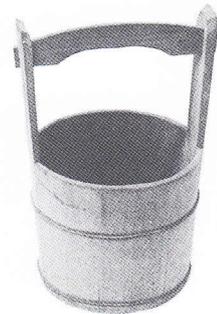
〔年頭行事用具〕



シオミズダテ 10-ロー-4
 茶碗 口径11.1cm 高さ5.7cm
 松葉 全長12cm
 お祓い用



ヒシャク 10-ロー-7
 全長46.7cm 246g
 杉 若水汲み用



テオケ 10-ロー-5
 口径28.5cm 全高47.8cm 1,455g
 杉 若水汲み用

年取りの膳とイナダキ

年取りの膳は、大変重要な食事であったから、その時の膳につける料理は古くからの形を重んじた。これは、いわゆる年取りゴツツオ（御馳走）といって、主婦たちは年末になると、その支度に掛り切りになった。

年取りゴツツオの中でも特に取揃える品に注意したのは、ヒラ椀に盛る煮物である。これは、人参・ゴボウ・百合・昆布・カンピョウ・クワイ・ハタイモ（里芋）・サツマイモ・ワラビ・クリ・コンニャク・焼豆腐などを大きく切って煮たもので、その品数も7品とか9品といってこだわった。この他に大根ナマスも作るし、別にオ

モノなどといって塩引の鮭または鱒の切身を添える。

膳につけるものではないが、この時必ず出るオカズに納豆があり、黒大豆の煮物も縁起物として出した。

この年取りの膳に家族がついた時、イナダキという大事な儀式を行なった。あらかじめ用意してトコサマ（床の間）に供えておいた盆に入れたフクデモチを年男が主人が持ち、家族各人の頭上に掲げて拝ま（イナダカ）せる。この時、「いくつになった」などと問いかける。このフクデモチが年玉としだま（魂）だったのである。餅はその席では食べず、正月になってから雑煮にして食べて祝った。

② 年頭行事用具

大正月は、年があらたまり、すべてのものが新しく始まり、万物の新しい生命がここで生まれる——そう考えたから、行動はみんな儀礼的な意味を持つ。

元朝、暗いうちに起きた年男は、柄杓も手桶も新しいものに松葉と昆布をつけて、まず「若水」を汲む。

それが済むと「初火」を焚きつける。この時の焚きつけはナルコママという豆殻で、明の方から点火する。

初火で沸かした湯で福茶を入れ、家族揃って「歯固め」をする。その時食べるのは干柿とカチグリである。

塩水を松葉で撒くシオミズダテで家を清め、「鎮守さま参り」に行く。この時、ハナイリ（洗米）を供える。

初詣から帰ると雑煮で祝い、「礼回り」に本家・分家・ムラうちを回る。この時ツモノボンを出す。これらが終わると家族揃って食事するが、これも年取りという。この日、米などを持って寺へ年始に行く。

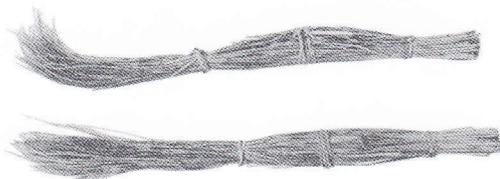
2日は仕事始め（別記）。4・5日ごろになると寺方からの年始がある。お供にハサミ箱を担がせ、モノモウスと声をかけて檀家を訪れたので、子供たちはモロモロと呼んだ。7日は七草で、十一日正月には蔵開きをした。



ナルコママ 10-ロ-8
全長60cm
大豆の茎 初火用



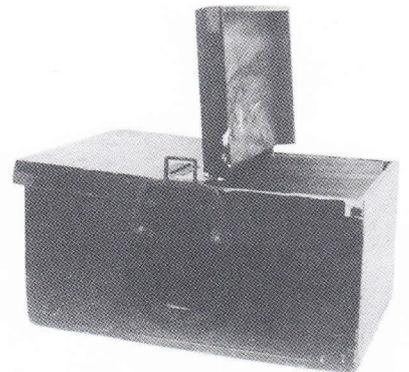
ツモノボン 10-ロ-10
31.6×31.6cm 高さ11.5cm
杉(漆塗り) 手掛盆用



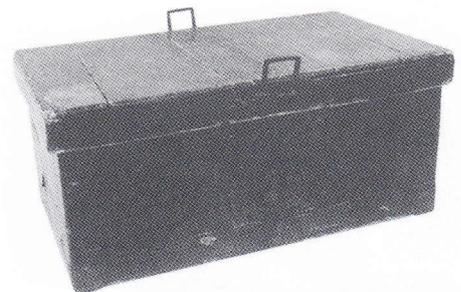
ナットツト 10-ロ-11
全長90cm
薬 正月納豆用



クシモチ 10-ロ-13
全長26cm(1本)
竹 小正月の串餅用



ハサミバコ 10-ロ-15
60.6×38.2cm 高さ27.8cm 5,200g
杉・金具 寺方年始用



ハサミバコ 10-ロ-14
62×38cm 高さ26.5cm 4,240g
杉・金具 寺方年始用

ツモノボン

元旦にムラ人たちは、それぞれにムラうちを年始に回る。このとき、礼を受ける家で回礼に来た客に差出すためのお盆を用意しておくが、中には米・串柿・干栗（カチグリ）・昆布で束ねた松・ミカンなどを入れる。

これを「オツモノ」などと言って差出すと、客は片手を出して手刀を切るようなしぐさで受け、その後で新年の挨拶を交わす。特別の客以外は玄関の入口で礼を済ますから、その場に用意しておく。

お手掛けともいわれるように、儀礼的な祝い物なので食べることはないが、古風でゆかしい景物である。



■年始客を迎えるようす

③ 社交贈答用具

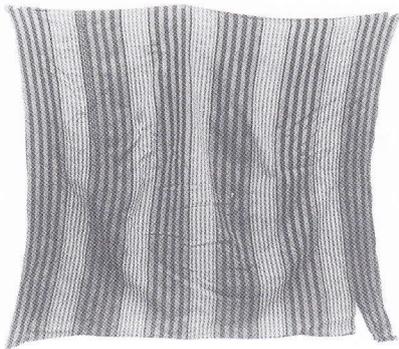
積雪期の社交的・儀礼的な物の贈答は、年末・年始に集中していた。年末でいえば、それは歳暮の品であるが、これは、その年に受けたお互いの恩義への謝意を表わす意味からである。しかしそれは、少し古い時代にあつては、形式よりも実用的なものが主体で、たとえば手作りの藁沓や搗いた餅の交換であつたりした。

それというのは、ムラという共同体の中では、結いであれ、助け手間や非日常時の助力であれ、長い暮らしの中に根づいた相互扶助で処理されていたのである。一年の区切りで言えば、田植え後のサナブリや稲刈り後の刈

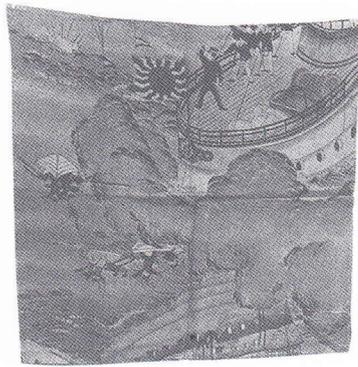
上げや秋ごとなどの心祝いに招くことでその気持ちは通じ、取立てた形式は不要だったのである。

これが新年になるとやや異なり、多少儀礼的になってくる。それは、今後の交誼を深め、お互いの絆を強くする意味も含むからで、年始の挨拶に訪れる時は多少の物を形にして持参した。とはいっても、それは手軽なもので、手拭一筋であつたり、少し前はツケギであつたりした。また、小正月16日や彼岸の仏様参りで訪れる時は、線香や蠟燭などを持参し仏壇に供えた。したがって、贈答用具といつても、風呂敷や正月料理用の重箱などで足りたのである。

〔社交贈答用具〕



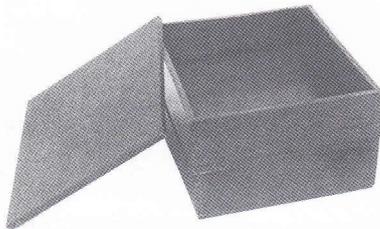
フロシキ 10-ロー-16
113×99cm 130g
木綿 歳暮・年始の贈答物用



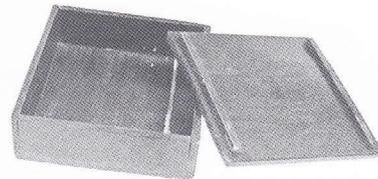
フクサ 10-ロー-17
38×38.5cm 27g
絹 年始の贈答物用



ケタチャ 10-ロー-22
24.8×15.8cm
和紙 祝茶(儀礼用贈答品)



ジュウバコ 10-ロー-20
21.3×19.6cm 高さ12.5cm 655g
杉(漆塗り) 正月料理用



ジュウバコ 10-ロー-18
19.2×17.8cm 高さ5.4cm 410g
杉(漆塗り) 歯固め用(串柿と干栗を入れる)

トラゲバサとトラゲッコ

トラゲバサは、取上げ婆さんのことで、以前、本職の産婆のいなかったころ、お産の世話をしてくれた人のことである。しかしトラゲバサは、単に産婆の代役をつとめただけでなく、その子の成育についても何かと世話をし、成長しても擬制母としての交際が続いた。

トラゲバサに対して、生まれた子をトラゲッコと呼ぶが、両者の間柄は実の母とは別の親密さで結ばれ、生涯を通じて交際が続いた。そのため、産婆や医師によって出産した子でも、特定の人を頼んでトラゲバサになつてもらうという場合も少なくなかった。

12月31日、年取りの膳が終ると、子供たちはそれぞれの膳についた御馳走やおモノの魚を重箱に詰めてもらい、風呂敷に包んで持参する。子供はそれぞれが自分のトラゲバサにこれを献上するのだが、これがこの日の何よりの楽しみなのである。それを待つトラゲバサも同じ思いで、なにがしかのものを見つくるって用意しておき、それを貰って喜ぶ子の顔を見るのが楽しみであった。

このささやかな贈答が強い絆になって、その子の入学や卒業、結婚式にも招かれるなど交際は細やかに続き、婆さんが亡くなると、子は血縁者同様に葬儀に参列した。

ケタチャ

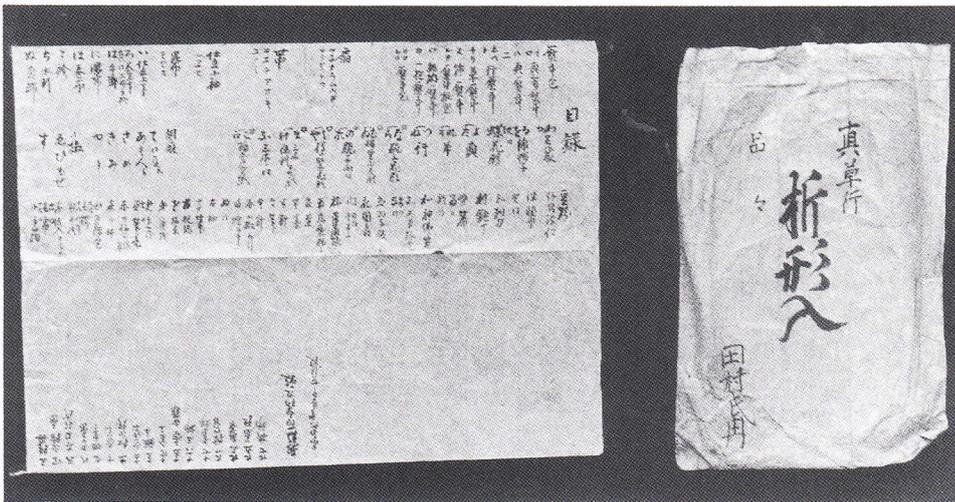
ケタチャは、儀礼専用に使われた「茶」で、ちよつとしたお招かれや挨拶の手持品として通用していたが、お茶として実用できるものではなかった。

これは、前頁で見るとような和紙の袋に茶殻や桑を乾燥させて入れたもので、本来は煎茶などであったものが、こうなっただけ。同様に、婚礼などに持参する扇子箱と呼ぶ桐箱があったが、これも中身は扇子でないものが多かった。これらの品は、そのまま他に回されることも多いから、検約のためにこうしたように思う。

ケタチャのケタが漢字でどう書くか不明だが、結納品

の茶を多喜茶と表書きするのと同様にするように思える。紙袋の表紙に使う版木は残っているが、目出たい図柄だけで、それと分かる文字はない。喜多茶とでもあてれば適当なようだが、それはともかく、祝い茶の意味があったことは、これを用いる場面からも察せられる。それが後に実際の茶と区別して理解され、通称となったようだ。

儀礼的交際の多い正月をはじめ、新春のお付き合いにはこのケタチャが大いに役立ったのであった。この頁に示した冠婚葬祭などの折紙も儀礼をあらわすのに重要視され、雪中の余暇をみて折り方を工夫したりしていた。

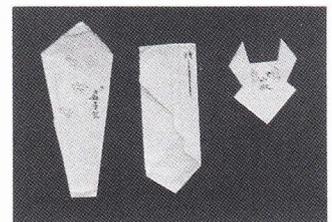
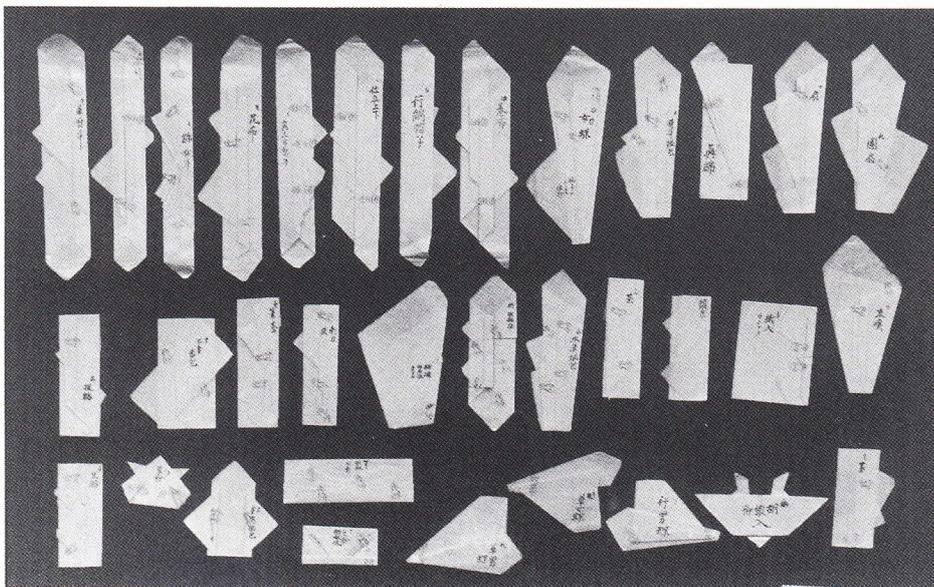


■目録(左)、折形入(右)

オリガタ 10-ロ-23

和紙 慶弔用折紙型

(冬季の余暇をみて折り方の手ほどきを受けた)



◀▲折形 (計37点)

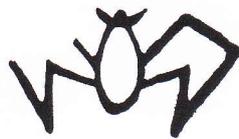
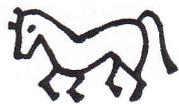
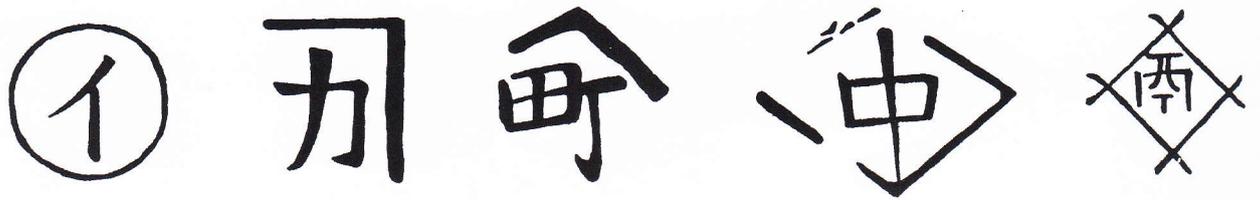
●信仰・儀礼用具品目一覧〈計246点〉

イ、信仰用具 ●神事・仏事等用具（お供え用）：ハナヅト・ハナ
オケ・オハナ・オミキドックリ・オミキグチ（灯明用）：タンコ
ロ・ロウソクタテ（お参り用）：ジュズブクロ・ジュズ（コト
ヨウカ行事用）：イッショウマス（ダイシコウ行事用）：ボン・
ワン・ハシ・ツエ

●大正月・年神迎え用具（煤払い用）：スオトコ・ワラヅト（門
松）：カドマツ・カドマツフダ（年徳神）：オタナゴモ・トシト
クジン（大黒神）：エビスダイコクフダ・ダイコクサマ（太子
講）：ショウトクタイシ（注連縄類）：シメナワ・ホラジメ・ゴ
ボウジメ・ワジメ（お供え用）：カザリガミ・カタ（正月行事
用）：ゼン・ドンブリ・ツチブテ・スベナワ・ベロベロ・カマブタ
（神仏護符類）：オフダ（商店配り物）：エガミ ●小正月行事
用具（若木迎え行事用）：ヘイツク・ナタ・ニナワ（団子飾り用）：
ダングノキ（鳥追い行事用）カマガミサマノエ・ゴヘイ・カマガ
ミサマ・ヒョウシギ（モグラモチ追い用）：ヨコヅチ（年占い用）：
ケエバシ・カユウラナイ（魔除け用）：ヤイカガシ・ジュウニガ
ツフダ・ワラウマ（火祭り用）：ドウラクジン・ニンギョウ・ノ
ンビル・アネサ ●節分行事用具：イッショウマス・イリナベ・ハ
シ ●初午行事用具：イナリサマノハタ・ワラザラ・サンダワラ
●十二講行事用具：ハタ・ユミヤ・ユミ・ヤ・マト・ワラヅト ●
涅槃行事用具：ネハンズ・コネバチ・ゴザ・ウチワ・テオケ・ダン
ゴブクロ ●天神講行事用具：テンジンサマ ●節供行事用具：ダ
イリビナ・ヒナドウグ ●サンヨ（裸押合い）行事用具：タワラ・
オフダ・シャモジ ●彼岸行事用具：コシキ・ワラ・オハナ ●そ
の他用（奉納グツ）：クツ

ロ、儀礼用具 ●年取り行事用具：ゼン・ワン ●年頭行事用具（お
祓い用）：シオミズダテ（若水汲み用）：テオケ・ヒシヤク（初
火用）：ナルコマメ（手掛盆用）：ツモノボン（正月納豆用）：
ナットヅト（串餅用串）：クシモチ（寺方年始用）ハサミバコ
●社交贈答用具：フロシキ・フクサ・ジュウバコ・ケタチャ・オリ
ガタ

焼印について



資料名	点数
コ シ キ	62
ヤ マ ゾ リ	9
コ ネ バ チ	7
コドモコシキ	5
ミ ソ オ ケ	4
ミソジャッペ	4
ヨ コ ツ チ	4

■積雪期用具を中心にみた焼印のある館有資料点数。(商標を除く)

ここに収集された用具類の中に、それを所有する上での必要から、その個体に注記（標識）を施したものが相当数あった。それは、家印・屋号・所有者名・家族個人の所有者名・公共的所有者名・製作者名・製作依頼所有者名・製作時点などである。注記方法は墨書と焼印に大別でき、焼印がその大半を占めている。以上のことから、ここでは焼印について紹介することにした。

焼印は、ヤキバンともいい、火で熱して捺す印判である。この焼印が当地方でいつごろから広く用いられたかは不明だが、家々で注文して作るようになるのは比較的新しいことで、当初は既製品を節季市などで求めて用いたものと思われる。しかし、焼印は、墨書よりも簡便であり、消えにくい利点がある。そのためであろうが、古い用具などには、焼け火箸で木印のように刻印したものがあ

焼印には主として家印を刻んであるが、家印は、それがその家の占有物であることを示す目的で付ける。したがって、使用頻度が高く、寄合い作業などで、他人のものと識別するため、また、盗難は別としても、貸借等で起りがちなトラブルを避けるためにも必要な処置であった。用具は耐久の家財であった。

印の図柄で一般的なものは○・へ・ㄗ・◇・✧などに文字を配したものが多かった。上図にあるように絵模様だけのものや学校名等のものもある。これとは別に他から移入した器具には、製作者・商社名などの商標として付したものの、計量具等には検査証印もあり多様である。しかし、生活的利用においては占有権の標示を目的とし、指定資料中の、ガス拾いの置き石、木挽き用具の木判と同一線上にある。したがって焼印や木判は、置き石や木印に発した一種の家紋のようにも見える。

収集地一覽総括表

分 類		十 日 町 市					
		水 沢 地 区	六 箇 地 区	川 治 地 区	十 日 町 地 区	中 条 地 区	下 条 地 区
1. 衣生活用具	イ. 被 物	1		5	11	11	4
	ロ. 着 物 類	35	26	34	35	32	53
	ハ. 履 物	4	3	10	21	33	16
	ニ. 雨 具 ・ 防 寒 具	4	1	9	19	8	15
	ホ. 裁 縫 ・ 洗 濯 用 具	14	2	11	31	16	8
2. 食生活用具	イ. 漬物仕込み用具	7		2	22	10	8
	ロ. 味噌仕込み用具	3	3	17	14	12	10
	ハ. 餅 搗 き 用 具	8	1	5	35	20	10
	ニ. 雪 室 用 具			4	8	7	5
	ホ. その他食生活用具	56	21	49	117	92	34
3. 住生活用具	イ. 防 風 雪 用 具	2		2	6	29	
	ロ. 除 雪 用 具	25	2	25	45	25	16
	ハ. 暖 房 用 具	36	9	29	103	65	34
	ニ. その他住生活用具	6	3	2	21	19	8
4. 生産・生業用具	イ. 脱穀調整等用具	34	7	17	32	59	24
	ロ. 手 仕 事 用 具	69	15	52	66	94	50
	ハ. 春 木 山 等 用 具	21		3	14	9	5
	ニ. 狩 猟 用 具	4		14	1	8	14
	ホ. 諸 職 用 具	14	4	18	129	98	88
	ヘ. その他生産・生業用具		1	3	18	14	6
5. 交通・通信用具	イ. 交 通 用 具	11	4	15	22	14	12
	ロ. 通 信 用 具				7	1	1
6. 運搬用具	イ. 橇	33	3	17	10	18	9
	ロ. 橇 付 属 用 具	13	1	10	5	10	5
	ハ. その他運搬用具	2		3	5	6	2
7. 社会生活用具			7	1	5	3	
8. 民俗知識用具		5		1	8	7	2
9. 娯楽・遊戯用具	イ. 娯 楽 用 具	6			11	16	3
	ロ. 遊 戯 用 具	27	4	14	40	47	21
10. 信仰・儀礼用具	イ. 信 仰 用 具	15	6	13	78	59	18
	ロ. 儀 礼 用 具	1		2	6	8	2
計		457	116	393	941	852	486

吉田地区	中魚沼郡			南魚沼郡		小千谷市	東頸城郡		計 (点数)
	津南町	中里村	川西町	塩沢町	六日町		松代町	松之山町	
3			4						39
18			19						252
22	1		7					1	118
3		1	1			1		1	63
11			4						97
5			1						55
5			1						65
10			2						91
4									28
33	2		11				1		416
	2								41
12	1			2					153
29	1		8						314
8									67
20	2		3				2		200
60	4		14						424
4									56
2	5								48
125	2	28	2						508
5			2						49
6	2								86
2									11
11	1		2						104
2									46
2			1						21
1							1		19
1			1						25
2			1						39
23	2		8		1				187
21	2	3	7					1	223
4									23
454	27	32	99	2	1	1	4	3	総数 3,868

参 考 文 献

- アンギンと釜神さま ——秋山郷の暮らしと民具—— 滝沢秀一著・国書刊行会発行・1990年刊
- 魚沼の郷 雪ことば集 林 明男著・扇屋書店発行・昭和60年刊
- 越佐の小正月行事 ——越後・佐渡の農耕儀礼調査報告書Ⅰ—— 新潟県教育委員会編・同発行・昭和57年刊
- 日本常民文化研究所調査報告第1集 小正月行事とモノツクリ ——秩父・越後・中部——
(財)日本常民文化研究所編・同発行・昭和53年刊
- 越能山都登〈復刻版〉 平 千秋・亀井協従著・中央出版発行・昭和48年刊
- こどもの四季 駒形さとし著・“こどもの四季”刊行会発行・昭和41年刊
- 市史リポートとおかまち 第2集 十日町市史編さん委員会編・同発行・昭和63年刊
- 市史リポートとおかまち 第4集 十日町市史編さん委員会編・同発行・平成2年刊
- 図説民俗探訪事典 大島暁雄他著・山川出版社発行・昭和58年刊
- 図録妻有の女衆と縮織り 十日町市博物館編・同発行・昭和62年刊
- 妻有郷 ——新潟県中魚沼郡学術調査報告書—— 新潟県教育委員会編・同発行・昭和33年刊
- 妻有地方の暮らしと歩み 十日町市博物館友の会郷土記録賞作品編集委員会編・十日町市博物館友の会発行
・平成2年刊
- 十日町市史 資料編Ⅰ 自然 十日町市史編さん委員会編・十日町市役所発行・平成4年刊
- 十日町市における文化財の調査Ⅴ 立教大学学校・社会教育講座・十日町市教育委員会編・同発行・昭和54年刊
- 新潟県十日町市の気象70年報 森林総合研究所十日町試験地編・同発行・1990年刊
- 新潟県の諸職 ——諸職関係民俗文化財調査報告書—— 新潟県教育委員会編・同発行・平成元年刊
- 写真集 明治・大正・昭和 十日町 十日町市博物館友の会編・国書刊行会発行・昭和57年刊
- ふるさとの記録 藤井の里 茂野寅一・茂野宗平共著・同発行・昭和58年刊
- 北越雪譜〈翻刻版〉 鈴木牧之著・野島出版発行・昭和45年刊
- 無形の民俗文化財記録第2集 越後・佐渡の定期市 -1977- 新潟県教育委員会編・同発行・昭和52年刊
- 雪 十日町市博物館常設展示解説書／1 十日町市博物館編・同発行・昭和56年刊
- 雪国とおかまち 十日町市役所総務課文書広報係編・十日町市役所発行・昭和63年刊

文化庁の一室に、今回のコレクションの指定申請書類を搬入した日から、もう二年の月日が経とうとしています。その日、約4,000点にもおよぶ資料カードの確認作業が終了したときには、すでに陽は落ちていました。雪とは無縁ともいえる東京で「雪国の文化」が認められるとは、しかもこれらの資料は、今では雪国の生活から忘れ去られ、消え失せようとしていることを考えると、何か複雑な思いにかられました。

さて、当博物館は地域の特性である「雪と織物と信濃川」をテーマに掲げ、それらを一層充実させるため調査・研究活動につとめて参りました。この中で、昭和61年に「越後縮関係資料」が、今回はその母体である「積雪期用具」が国指定を受け、当館としては二つめの重要有形民俗文化財の誕生となりました。そのための直接的作業は昭和62年度から開始されましたが、資料収集は既に昭和40年代から始まっておりました。ですから、このコレクションも前回と同様、約20年もの歳月をかけてまとめあげられたわけです。これらの、かつては雪国の生活必需品であった民具は、みな土蔵や物置、あるいは屋根裏などに眠っていたのですが、市民の皆さまの理解と協力によって当館に寄贈され、かろうじて消失をまぬがれたものです。また、これらの民具の整理作業も大変な根気を必要とし、資料カードづくりは1日1人あたり約2～3点しかできず、これだけでも約4年の月日を要しました。このようにして、「積雪期用具」は重要有形民俗文化財として甦ったのです。

ところで、この図録を編集しながら、しばしばペンが鈍ることも少なくありませんでした。なぜなら、それらはかつての雪国のごくあたりまえな日常生活であるが故に、意識的にその意味を捉え、あらためて考え直すことがほとんどなかったからです。しかし、こうして見ると、歴史の表面には現れてこない人たち、子供や女性を含めた多くの庶民の生活史が浮かびあがってくることに強く心を動かされます。ものの中にも心があり、わたしたちの祖先の喜びや悲しみ、そして願いが隠されているのだということを今さらのように感じています。

最後になりましたが、ご協力いただきました多くの方々、そしてご指導いただきました天野武先生にあらためて感謝を申しあげ、お礼にかえさせていただきます。

なお、本書の解説文は滝沢秀一が執筆し、編集・図版等は高橋由美子が担当しました。

協力者・関係者一覧

●調査協力（以下五十音順 敬称略）

阿部堯春（故人） 阿部治郎 池田良夫 小川作治
尾身ミノ 風間文平 春日マサヲ 小島市松 佐藤
庄次 佐藤秀次 関口昭二 田村政治 二瓶虎太郎
庭野正芳 水落クニ 水落サク 水落タカ 水落仁
作 湯本弘士 若井八郎右衛門 十日町市博物館友
の会民俗研究グループ 十日町郵便局

●写真提供

大関義男 小杉洋司 多田 滋 十日町市建設部克
雪都市計画課 十日町市史編さん室 十日町市総務
部総務課

●資料整理協力

蕪木賢治 佐藤実千代 根津房子 丸山証三 柳
多津 山口真佐子 吉沢千代子

●関係職員

阿部恭平 石原正敏 金沢政子 斎木 仁 菅沼
亘 高橋由美子 滝沢秀一 竹内俊道 波形卯二
樋口克子 星野元一 星野奈美

雪国十日町の暮らしと民具

重要有形
民俗文化財 十日町の積雪期用具図録

平成4年(1992)10月30日 第一刷発行

令和2年(2020)9月30日 第二刷発行

編集／十日町市博物館

発行／十日町市博物館友の会

〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448-9

TEL 025-757-5531

FAX 025-757-6998

印刷／株式会社みらい
